



僕の家が金髪碧眼姉妹ハーレムで以下略

八重代かりす

中学の時、親友にこんな風に言われた事がある。

——「…………おまえ、アイドルの追っかけとかを鼻で嗤う類だろ？」

僕の答えは当然、

——「理解できないのは事実だね」

だった。

追っかければ、振り向いてもらえるというなら、わかる。しかし、その確率はほとんどない。なのに、何故、自分の貴重な時間を削るのか？ 追いかける方だって、迷惑だ。それなら、アニメ——いいや、それこそ、そのアイドルが登場する番組でも見ていた方がお互いの幸せである……。

滔々と語ってから、少し悔やんだ。よく考えれば、『追っかける』過程そのものを愉しむ人もいるはずだ。それを見落としていたのは僕の誤りである。

とはいえ、追いかける方の迷惑は変わらないだろう。

女性にだって選ぶ権利がある。

容姿にも才能にも特筆すべきところがない。その上、異性に対する積極性すらない。

そんな奴と一緒にになりたい奴がいるとはとても思えない。

だから、僕は一生、女の子に縁のない人生を送るんだろう。

僕の名は富山中道。とみやま なかみち

十五の春まではそう思っていた。

一日目

その日、家の前に真っ赤な自動二輪車が止まっていた。

この時点で、妙な予感を感じたのだ。僕が十五年を過ごしてきた高志は田舎なので、まだ自家用車の需要はある。自転車も多い。だが、自動二輪は珍しい。少なくとも、僕の知り合いに自動二輪の乗り手はいない。

しかも、その自動二輪は競技的で流線的だった。不得手な分野だが、原付『ママチャリ』でない事は断言できる。父や母の知り合いが乗りそうな機種ではない。

——まさか暴走族とか？

自分の発想の短絡さを呆れつつ、玄関の鍵を開ける。今は核家族三人暮らしで、家には学校帰りの僕一人……のはずだ。

実際、家の中に荒らされた形跡は皆無だった。

僕はほっと息をつく。どうやら、考え過ぎ立ったようだ。

そして、部屋の襖ふすまを開ける。

すると、**金髪碧眼の美少女が目の前にいた。**

僕は反射的に部屋の襖を閉めた。

とりあえず、深呼吸をした。そして頭を充分に冷やした。

僕は再び部屋の襖を開ける。

中にいた美少女『達』が揃って立ち上がり、僕に一斉敬礼をした。

僕はまた部屋の襖を閉める。

反射的に数えていた人数を思い出す。確か三人いた。しかも……

僕は確かめるためにもう一度部屋の襖を開ける。

相変わらず、美少女は敬礼を崩していなかった。そう金髪碧眼の美少女だった。

そ・れ・も・三・人・そ・ろ・っ・て……!!

——ど、どうなっているの？

僕は混乱した。だが、こうなると現実を直視せざるを得ない。

無機的なまでに整った顔かんばせ。明るい金髪ゴールデンブロードと空色の碧眼スカイブルーの彩り。雀斑そばかす一つない完璧な皓しろさの肌。それは精緻過ぎる造形の、極上の美少女だった。

しかも、整っているのは顔だけでない。体付きも、だ。嘘のように細い腰と長い足、若々しい張りの小さなお尻、どれ一つ崩れていない。

そして、何故、そんな体格までわかるかというところ、それが見える恰好だったからだ。裸という訳ではない。むしろ、肌の露出は少ない。ただし、裸同然の恰好だった。

彼女たちが揃って着ているのは『首元から踝まで覆う極薄のウェットスーツ』スーツと云えばいいのだろうか？　そして、その素材らしき弾性樹脂スチツは服というよりも膜フィルムのような薄さなのだ。

——まるでSFアニメのヒロインだ……。

ただ、アニメなら三人とも金髪碧眼の美少女になどしないだろう。描き分けが難しい。そも美少女というだけで、容姿が収斂されてしまうのだ。どうしても似たり寄ったりで、個人の識別が難しくなってしまう。

実際、僕はこの彼女たちの顔を見分ける自信がない。

今、並べた容姿の特徴が『三人のうちの誰のものか』について、特定しなかったのも、まさに三人に共通する特徴だからである。

——一応、体付きで区別できるけど……。

と、大小様々だが、例外なく形の良い双丘を凝視してから気付いた。僕は年頃の女性をじろじろ見つめている。さっきは顔で今は胸だ。正直、嫌な顔ぐらいはされるかと思った。しかし、彼女達は無表情を崩さない。

——こ、これは無表情系？　本気でアニメの世界だな……。

その時、背後に気配がする。

振り返ると……。

そこにはやはり、金髪碧眼の美女が立っていた。

やはり、同じ顔——ただし、顔立ちは大人びていて、また柔らかかった（逆に言えば、最初の三人は『硬い』のだ）。臀部まで真っ直ぐ伸びた長髪を首の後ろで束ねている。

おそらく、一人だけ歳が上だろう。パツと見、大学生ぐらいで、背も明らかに高い。それに着衣も一人だけ趣が違っていた。いや、頭部以外を覆う密着繊維という点では、他の少女たちと同じだ。しかし、こちらには厚みがある。その証拠にフロントジッパーが付いていた。三人組のように膜フィルム並みの薄さでは無理な芸当である。

「……それでも、この服の厚さは五ミリあるかないかだよな……？」

大まかな印象も、ウェットスーツというよりはライダースーツに近い。その上、ハードポイント（日本語に訳せば、『外付け器具固定部位』だろうか？ ……何故航空軍用語が出てくるかって？ それは僕がロボットアニメの好きな平凡な日本男児だからだ）らしき部分もある。

一応一番実用的な格好と言えなくもない。

ただ、それが何故か臍の辺りまでフロントジッパーを下している。

大きく露出した肌が艶めかしい。彼女たちも皮膚の露出自体は控えめなので、かえって、その白さが映える。また、長身に相応しい……その、巨乳なので……これも目のやり場に困る。

「……ていうか、ノーブラ？」

そして、そんなお姉さんがにこやかに

「どうもはじめまして。富山中道君ですね？ 私は人材派遣会社マリオン・カンパニーのメッサリーナ・マリオンです。よろしく」

と流暢な日本語で話しかけてきた。

僕は異様な事態に困惑しながらも、とりあえず意思疎通を図る事にした。

「ええと、マリオンさん？」

「メッサリーナと呼んでください。そうしないと、ややこしい事になるので」

「はあ……」意味が分からないが、僕は言われた通りにした。とりあえず、話を進めねばならない。「では、メッサリーナさん。この娘達は一体？ というか、あなたも何者ですか？」

「金髪碧眼美少女です」

メッサリーナさんは堂々と答えた。

「……いや、それは見りやわかるって。」

「不満げですね？」

「ご、ごめんなさい」どうも顔に出ていたらしい。

「いいですよ。私ももう二十歳ですからね。君から見たらもうオバサンかもしれませぬ。しかし、金髪碧眼美少女ではなくとも、金髪碧眼美女とは認めてもらえないでしょうか？」

そういう意味じゃねーよ。いや、美人なのは認めるけどさ。

「まして、あの娘たちは正真正銘の金髪碧眼美少女——違います？」

「………」

僕は思わず口ごもった。普通、こんな台詞はなかなか口にできない。それを作られたかのような美貌の主が平然と言ってくる。どう言い返せばいいのか、わからない。すると、メツサリーナさんは勝手に話を進める。

「それでは、彼女たち自身に自己紹介してもらいましょう」

「はい」三人の美少女の一人が答えた。案の定、メツサリーナさんに似て、綺麗な日本語だったが、より若々しい。聞き取り易い明晰な発音で言う。「私はエムピービー・サーティエイト十五歳。身長159センチ体重45キロ。スリーサイズは上から82・57：

「いやなんで、そんなことまで!？」

僕は大声で話を遮った。顔が熱くなっている自覚もある。

だが、どこの世界に自己紹介でスリーサイズを名乗る娘がいる？

すると、エムピーナんたらを名乗った少女が首を傾げる。

「聞きたくありませんか？」

この娘は駄目だ——と、まだまともそうに思えるメツサリーナさんに視線を向ける。

「私の……いえ、ドクターの趣味です。全く困ったものですね」

……今、言い直したよね？　つか、ドクターって誰だよ？　趣味ってどういう事だよ？

「ちなみに私はメツサリーナ・マリオン二十歳。身長174センチ体重54キロ。スリーサイズは上から92・60・89——二年前から変わらず、70のFカップです」

「困った趣味と思うなら、そんな事を口にするなよ！」

僕は思わずツッコんでしまった。

「えー。でも、君は巨乳派でしょう？」

「い、いきなり、何を?!」

「だって、視線が胸元に集中していますよ」

「!……い、いや、それは……!」

すると、横から……

「あの、男性はやはり大きな乳房が好きなのでしょうか？」

と、エムピーナんたらが、己の胸を持ち上げ（つまり、そのくらいはある乳房を掴み）ながら、訊ねてきた。

「どうかしらねえ。マスターは貧乳好きな気がするし……」

だから、あんたら、僕の家で何話し込んでいるんだよ。

僕は一言言ってやろうと、大きく息を吸う。

だがその時、携帯の着信音と震動音が鳴った。僕のものではない。メツサリーナさんの

右腰に付属している端末だ。

「Hi!」とメッサリーナさんは英語で電話に出る。「Three persons of B series are as planned.Yes.I think here has still margin....Probably Imprinting Hypothesis is groundless fears.Even if a Hypothesis is right,even if he is incompetent,he is good.Moreover,the first incompetent master.....」

悔しい事に聞き取れたのはそこまでだった。メッサリーナさんが僕の視線に気付いたのか、一気に早口になったのだ。心なしか俗語も増えた気がする。英語が大の苦手な僕では、到底ついていけなかった。

内心屈辱に震えていると、メッサリーナさんは「OK.Thanks」と電話を切った。そして、僕へ笑顔を向ける。

「一応、説明をしようと思っていたのですが、急用が入りましたので一度お暇させてもらいます」

「え？ ええっ？」

「あの娘たちの面倒をお願いします。はい、これ生活費」

と、メッサリーナさんは何かを左腰の『ハードポイント』から取り出し、机の上に置いた。

——あの、それ、福・沢・諭・吉の札・束に見えるんですけど……まさか本物？

そして、彼女はすたすたと廊下を歩き、玄関に向かう。ちなみにこの人、**歩くだけで、色々揺れていた。**

僕は美少女三人と札束を部屋に残すのを一瞬躊躇った。が、やむを得ず、追いかける。「待って下さい！ そんな事をいきなり言われても……！ 大体ここは僕ではなく、僕の親の家ですよ！」

「親御さんにはこちらから連絡してあります。ただし、一週間ほど帰られないはずですよ。その辺りよろしくお願いします」

「はあ？」

母親は祖母の介護で泊まり込む事は予定に入っていた。しかし、父親は何故？ 元々、仕事が忙しい人だったが、一週間は長すぎる。

……いや、これって。

「あ、警察に連絡すると面倒になりますよ。」

「……！」

「もつとも、我々に害意はありません。その証明のためにも、信用ならないなら、どうぞ、110番通報してください。でも、面白い事にならないのは、あなたの方がよくおわかり

なのでは？」

そして、メツサリーナさんは屋外に出て、件の自動二輪に跨り、颯爽と去って行った。

金髪碧眼美少女三人は相変わらず、僕の家に住居座っている。

だから、僕は五分で当面の行動指針をまとめた。

1…警察へは連絡しない。どう考えても、面倒な事になる。仮に駆けつけた警官個人が僕の話を通じてくれても、職務上、僕と彼女らを拘束する事になるだろう。さもなくば、警官失格だ。

2…札束（確認したが、たしかに五十万円あった！）には手を出さない。当面の衣食住には不足していないし、母親から緊急用の生活費も預けられているのだ。

3…友人知人への連絡はしない。第一、電話しても、状況を信じてもらえそうにない。唯一、中学の親友は頼りになりそうだったが、だからこそ、彼に頼むのは最後の手段だ。

4…母にも連絡はしない。僕の両親は良くも悪くも夫唱婦随な昭和の夫婦だった。母は息子の目から見ても美人だったし、家事全般に優れている。子供に対しては口うるさいが親としては立派だと思う。しかし、重要な決断は常に父へ委ねる傾向にあった。

5…だから、父に電話連絡する。

僕が携帯端末を操作すると、父は意外にも早く出てくれた。

ただし、不機嫌な声で…。

『……なんだ。今忙しいんだぞ』

「あ、父さん。信じてもらえないかもしれないけど…。」

『家に見知らぬ女がいたか？』

「！　　そ、そうなんだ！　　それで…。」

『ああ、それは言われた通りにはしておけばいい』

「へ？」

『背の高い金髪の白人だろ？　　で、そいつが似たような娘を何人か連れてきたと？』

「う、うん。その通りだよ！」

『だったら、問題ない。仕事の関係でな。うちで預かる事になった。あー、そう、ホームステイみたいなものだ』

『「み・たい・な・もの」って?!」

僕は珍しく父に抗弁した。

二重三重におかしい。

第一に父は『み・たい・な・もの』などという曖昧な物言いを嫌う。

第二に父は社交的ではない。ホームステイの外国人? 受け入れるなど、好むはずもない。

第三に——**何より彼女たちは絶対おかしい。**

これに対し、父は簡潔に返答する。

『うるさい。俺は忙しい。要件は伝えた。以上だ』

そして、無情にも電話は切れた。

僕は暗澹たる気分で、容姿だけは文句なしの美少女三人に向かう。

「……と、とりあえず、全員自己紹介してもらおうか?」

すると、彼女たちは素直に答える。

「私はエムピービー・サーティエイト十五歳。身長159センチ体重45キロ。スリーサイズは上から82・57・84、65のCカップです」

「私はエムピービー・フォーティフォー十四歳。身長164センチ体重47キロ。スリーサイズは上から85・58・84、65のDカップです」

「私はエムピービー・ファイティワン十三歳。身長152センチ体重39キロ。スリーサイズは上から75・54・77、65のAカップです」

頭痛がしてきた。

「えーと、咽喉のどが乾いたり、お腹がすいたり……?」

していないだろうなあ——と思いつつながら、僕は一応訊たずねた。金髪碧眼の少女三人は若く美しい。つまりは健康で、疲労や飢餓の様子は無い。だからこそ、僕は彼女たちが犯罪の被害者である可能性を検討せず、警察への連絡も中止したのだ。

しかし、美少女三人はお互いの顔を見渡すと、一斉に頷き、次のように言った。

「「それよりむしろ入浴を希望します」」

……さあ、厄介なことになってきたぞ。

二日目

結論から言う。**金髪碧眼美少女が増えた。**

翌朝、玄関の呼び鈴が鳴った。のこのこ出ていくと、同じ容姿と着衣の【彼女たち】が並んでいたのだ。

「私はエムピービー・ナインティーン十七歳。身長171センチ体重51キロ。スリーサイズは上から89・59・89、70のEカップです」

「私はエムピービー・トゥエンティスリー十六歳。身長161センチ体重47キロ。スリーサイズは上から87・59・87、70のDカップです」

「私はエムピービー・ファイティスリー十三歳。身長151センチ体重38キロ。スリーサイズは上から73・54・77、65のAAカップです」

……しかも、これ、やっぱり法則性があるよね？

人目を気にし、僕は黙って、彼女たちを家の中に招き入れた。

そして、玄関を開けると即座に尋ねる。

「昨日から、気になっていたんだけど、MPBって、何かの略語？」

「は。 Marion plan Production model B series の略です」

「プロダクションモデルって……僕はロボットアニメで使われていたその言葉を知っていた。『量産型』って意味？」

「『製品型』という意味です」

金髪碧眼美少女はあっさり答える。……それも、凄まじく深読みできる内容だった。

——メツサリーナさんが言っていた『人材派遣会社』って、どういう会社なんだ？

この期に及んでも、僕には【彼女たち】の見分けがつかない。だから、この返答も3+3で6名になった美少女のうち、誰の発言かはわからない。

それ程、似通った顔の美少女達なのだ。

僕にコーカソイド系の知人は皆無に等しい。金髪碧眼の美少女ともなれば、当然絶無だ。おまけにモテない。だから、現実女性の顔を凝視した経験も乏しい。

——二次元美少女なら、しょっちゅう凝視するんだけどなあ……いや、そうではなく。

だからなのか？ 僕に女性経験が乏しいから、女性の顔の識別が困難なのか？

——いやいや、そんなわけないだろう。

僕は脳内で一人ツッコミを入れた。いくらなんでもそれはない。

——結局、この娘達がそれだけ似ているんだ。多分、後天的な教育環境が似ていただけではない。おそらく、先天的な遺伝情報も……。

そもそも、金髪も碧眼も劣性遺伝である。重複する確率は低い。そんな美少女が揃っている時点で作為を疑わざるを得ない。

僕は何だかゾツとしながらも、一応訊ねてみる。

「じゃあ、もう一つ、例えば……19から23の間は欠番？」

「いえ、存在しています」

ああ、やつぱりね……。エムピー云々で最後のは『通し番号』シリアルナンバーというわけだ。
「彼女たちは今どこに？」

「申し訳ありません。それは部外秘です。知っていたとしても、お答えできません」
「だろうねえ……」

その返答は予測済みでもあった。

僕も一晚、無為に過ごしたわけではない。最初の三人にも色々質問したのだ。ところが、スリーサイズは聞かれてもいないのにペラペラ話すくせに、今のような質問になると『部外秘です』『知りません』『(知っていたとしても)お答えできません』になったのだ。

——僕がやったホームステイは少なくともこんなじゃなかったよなあ……。

これではまるで軍事モノのアニメカラノベである。違いと言えば、僕に情報源としての価値がないため、【彼女たち】からの質問がなかった事ぐらいだ。

「……じゃあ、もう一つ、君らはメッサリーナ・マリオンさんを御存知？」

「はい。我々はあるの方の指示で動いています」

「じゃあさ、『メッサリーナ・マリオン』って、あの人の本名？」

この質問は、今朝が初めてだった。

昨夜、色々質問攻めにした挙句、僕は僕なりに情報収集に励んだ。当然、メッサリーナ・マリオンについても検索した。

生憎、メッサリーナについてはどうとでも解釈できるので、芳しい結果にはならなかった。しかし、メッサリーナについては、はっきりとした結果が出た。

すなわち、ヴァレリア Valeria メッサリーナ Messalina——古代ローマ帝政初期の歴史家皇帝クラウディウスの皇妃である。

(ちなみに僕はメッサリーナそのものよりも歴史家皇帝クラウディウスに魅了されてしまった。尊敬・感動・超面白い。同じ歴史家皇帝でも三国志の孫休とえらい違いである。どこで差がついたのか……普通に考えれば、年齢だろうか？ それこそ、古代ローマでは年輪による円熟を重んじたという。『長寿の功』を重んじただけでない。要職に就く条件として、制度的に年齢を条件としていたのだ。実に興味深い。僕はごく平凡な日本男子高校生である。だから、三皇五帝と夏商革命と殷周革命と春秋五覇と戦国七雄と楚漢戦争と光武帝と雲台二十八将十馬援と三国志以外の世界史には無知なのだが、これを機会に西洋史も勉強してみようか……と時間を費やしてしまった)。

この皇妃メッサリーナは色々胡散臭い醜聞の持ち主であり、現代でも『阿婆擦れ女』の代名詞になっているという。

何故か乳房を半出ししていた美女には相応しい名には思える。だが、まともな親なら、

娘に「メッサリーナ」とは付けない。メッサリーナの名故にあんな恰好をしていると考えるより、あんな恰好故にメッサリーナ呼ばわりされていると考えるべきだ。

だからこそその質問であったが、彼女らの返答はやはり同じであった。

「申し訳ありません。それは部外秘です。知っていたとしても、お答えできません」

「そんな事だと思ったよ」

とはいえ、これで『マリオン・カンパニー』とやらの胡散臭さがさらに増したわけだ。今更だが、ただの人材派遣会社ではあるまい。

しかし、それがわかったところで僕の選択肢は限られている。

「……入浴を希望する？ 昨夜、あの娘たちがピカピカにしてくれたから、すぐ入れるよ」

僕は一日目の三人を指して提案した。

彼女達は綺麗好きだった。昨日の入浴希望に対し、僕は少し考えたが、結局は『勝手に洗って、勝手に入れればいい。僕はその後で入る』という結論になった。すると、彼女達は備蓄の洗剤を使いきる勢いで、風呂場を隅々まで掃除し——その後、入浴した。

家族の名誉のために言っておくと、僕らの風呂場は別段汚くはない。むしろ、母は家事万能なので、風呂場の掃除もちゃんとしてあった。ただし、それは所詮一般家庭の水準である。さすがに浴槽はきちんと洗うものの、天井にこびりついた黴かびぐらいは見逃すのだ。

ところが、彼女達三人は違った。

水垢一つ逃すまいという勢いで、塩素系洗剤を使いまくり、徹底的な掃除を行ったのだ。その結果、今や風呂場は文字通りのピカピカで、年頃の少女を招いても恥ずかしくない状態である。……いや、その少女たちに掃除させたのだが……。

「それと僕はもうすぐ学校に行くから。我が家の決まりについてもあの三人に聞いて」

「了解。先行着任三体と情報共有を行います」

——……本当に大丈夫なのかな……？

美少女は顔を引き締めて答えたが、僕はいささか不安だった。

僕の住む高志は田舎だ。

だから、自宅から、高校までの十キロは自転車通学となる。

そして、その約四十分の登下校は自転車を漕ぎながら、好きなロボットアニメについて夢想するのが日課だった。

しかし、さすがに今日はあの美少女達で頭がいっぱいである。
田圃道を自転車で走りながら自問自答する。

「ううう、あの娘たちを家に置いてきてよかったのか……？」

父の言葉はある。皆勤賞を逃すのも惜しい。とはいえ、見ず知らずの人間を家に置いておくのは心もとない。僕は神経質なのだ。

あの風呂掃除の見事さからすれば、【彼女たち】も基本的な生活習慣は意外と身に付けているようだ。だが、一般常識の面は怪しい。極めて怪しい。

その上、僕はあの娘らを信頼していない。

率直に言つて、窃盗が心配だし、極端な話、美人局つつもたせの危険もある。勿論……

「対費用効率が悪いから、可能性としては低い……はず」

だからこそ、僕は彼女らを家に残して、こうして自転車を漕いでいる。

我が家も僕も貧しくはないが、それ程に豊かでもない。盗むにしても絞り取るにしても、限度がある。コン泥ならともかく、あの六人——いや、メツサリーナさんを入れれば七人の獲物には相応しくない。

何せ、あれだけの美少女なのだ。金を稼ぐ手段は無数にある。にもかかわらず、うちの財産を狙うのは効率が悪過ぎる。だって、本当に美少女なのだ。顔も、身体も……

そこで、頬が熱くなる。【彼女たち】の身体が描く、麗しの曲線を思い出したのだ。あのピチピチなウェットスーツもどきが、目に焼き付いて離れないのだ。

「だ、大体、なんであの六人はあんな恰好なんだろう？」

ウェットスーツもどきとはいふものの、潜水服にはあるはずの付属機材がない。視界を遮るものがないので、思春期男子的に嬉しくないと言えば嘘になるが……

さらに言えば、あんな薄くする必要があるのか？

「逆にメツサリーナさんのライダースーツもどきはハードポイントも厚みもあって、それなりに機能的だったよな……」

とはいえ、技術や素材、さらに『設計思想』が共通しているのは素人目にもわかる。皮膚に密着し緩みや弛みを許さない極薄の一体形成弾性樹脂だ。

「……あの六人のウェットスーツもどきはその基本形？で、メツサリーナさんのライダースーツもどきはそれを現場向けに再設計した実用形？本気でSFじみてきたな……」

もう一つ共通して事がある。【彼女たち】はあの姿への恥じらいがない事だ。

ただし、メツサリーナさんは嫣然としていたのに対し、他の六人は平然としていた。つまり、メツサリーナさんはわざと色気を振りまいている。意図して、肌を晒しているだけあって、自分の肉体への視線を理解し活用しようとしている。

逆に、あの六人は自分達への視線に無頓着なだけにも見える。その点、幼い。

「あの六人……着ているものだけでなく、中身も『原形質的』なんだよな……」

そんな事を考えていると、校門に近づいてきた。

校門など単なる通過点なのだが、今日は何故か人集りができており、騒がしい。

「何だろう？」

僕は首を傾げつつも、それを避けて、玄関に入ろうとする。

だが、その時、携帯端末に着信が来た。見知らぬ番号だったが、僕は躊躇わずに出る。

万が一、登録漏れの知人だったりすると、貴重な機会を逃す事になる。僕は友達がいらない。だから、すぐに電話に出るのだ。

「はい」

『富山中道君？』

「そうですけど……」僕はその声に聴き覚えがあった。「え、メツサリーナさん？」

『はい。メツサリーナです。ところで富山君、今、校門前を通りませんでした？』

「な、なんでそんな事を？」

『ちゃんと見えましたから。ていうか、酷いじゃないですか。私を無視して、行っちゃうなんて』

「???? すいません。意味が分かりかねます」

「だから、こっちですよ。おい、富山君く」

その声は電話越しではない。生の肉声だった。

メツサリーナさんは校門前から、こちらに手を振っていた。

身体のメリハリ丸わかりな、例のぴっちりライダースーツもどきで。

昨日と同じく臍までジッパーを下ろし、真っ白な肌と大きな乳房を半出しにして。

金髪碧眼の極上美女は笑顔で僕に手を振っていた。

——ううう、嫌だよお。目立ちたくないよお……。

あれ程の美人となると、男子生徒は気後れするらしい。皆、遠巻きに見ているばかりだ。

逆に女子生徒は無邪気に近寄ってキヤーキヤー騒いでいる。いずれにせよ、メツサリー

ナ・マリオンは注目を集めていた。当然だ。金髪碧眼の極上美女なんて、現実ではまずお

目にかかれぬ。それが自分の通う高校に突然現れれば、見物したくもなる。その結果が

校門前の人集りだったのだ。

そして、その人集りの中心たるメッサリーナさんが僕に手を振り続ける。

「ねー、富山君。お話ししようよ」

——この女、わざとやっていやがる……!

僕は腹が立った。

メッサリーナさんが僕に目を向け、僕の名を呼ぶ度に、視線の一部は僕に向かう。さらに人集りが割れ、僕とメッサリーナさんとの間に道ができる。知り合いらしい僕との仲を邪魔しないようにという配慮だ。生徒の質の高さといえる。しかし、不信や嫉妬という感情とは無縁ではない。

どう見ても冴えない一年、中学時代はさぞやスクールカースト下位だったであろう男子——つまり、僕が金髪碧眼の美女に招かれている事に、納得いかない視線が突き刺さってくるのだ。

——いつそ、逃げてやろうか？

とすら思う。あのエムピーなんてたら六人は浮世離れしている。が、このメッサリーナ・マリオンは違う。僕の居心地の悪さは察せるはずだ。なのに、彼女はあえてやっている。

そこで僕は首を振る。彼女を問い質さねばならない。

だから、僕は視線を無視し、その道を突き進む。

メッサリーナさんは何を考えているのか、ニコニコ笑顔のままだ。

僕は一応小声で訊ねる。周りに聞かれるのも困る。

「どうなっているんですか？ 三人も増えましたよ」

「あはははは、こっちにも事情がありました」

「僕にも事情はあるんです！」

僕が語気を強めると、メッサリーナさんは申し訳なさそうな顔をした。

「……すみません。昨日は本当に立て込んでいました」

意外な反応だった。正直、もっと自信満々な女性だと思っていた。しかし、今の彼女は中間管理職らしき悲哀を匂わせている。

僕は単純なのだろう。決意の威勢も削がれざるをえない。

「……とにかく、僕はあの六人を預かればいいんですね？」

「………」

？ メッサリーナさんは不思議な沈黙をした。

「僕は『六人』を預かればいいんですよね？」

一応、人数を強調して、確認してみる。

「………」

さらに沈黙が続く。僕は《Marion plan》^{マリオンプラン}とやらの性質を思い出した。
「合計『六人』ですね？」

「……もうちよつといけません？」

「正気ですか！？」

「ね、ちよつとだけちよつとだけですから」

「だから、正気かと聞いているんです！？」

「では、あと三人追加で。ロリ巨乳もいますよ」

「あんた、うちをなんだと思っている？！ ただの民家だぞ！ 昨日まで三人のところに、何でいきなり九人も押しかけてくるんだよ？！」

「いいじゃないですか。マスターなんていきなり三十六人も面倒を見たんですよ」

「知らねえよっ！！」

僕は生れて初めて、こんな柄の悪い台詞を吐く羽目になった。

三日目

再び結論を言う。**金髪碧眼美少女はまた増えた。**

翌朝、玄関の呼び鈴が鳴った。渋々出ると、やはり同じ容姿と同じ着衣の【彼女たち】が並んでいたのだ。

「私はエムピービー・トウエンティシックス十六歳。身長154センチ体重43キロ。スリーサイズは上から88・58・84、65のEカップです」

「私はエムピービー・ファイティエイト十三歳。身長149センチ体重40キロ。スリーサイズは上から80・55・82、60のDカップです」

「私はエムピービー・ナインティセブン十歳。身長135センチ体重30キロ。スリーサイズは上から62・47・64、55のAAAカップです」

——ああ、わかった。わかったよ。わかったから、早く中に入って。ご近所に見られるとまずいからね。

僕が目線で示すと、新参の美少女三人は順々に玄関をくぐる。隣を通る度にいい匂いがして、気が気でない。だが、僕は鋼の心で三名へ簡潔に伝える。

「入浴を希望するなら、もう湯張りまで済ませてある。この家の決まりについては、後で先行着任六名と情報共有を行う事」

「了解」

そう言って、美少女三人は浴室に向かう。僕もさすがにこの先は付き合えない。

次に僕は他の美少女六人に尋ねる。

「食事はどう？ 不満はない？」

「質的には問題ありません。ただ、量的にはいずれ不足するでしょう。我々の体調を維持するなら、何らかの形で食糧補充が必要になってくるかと」

「だろうねえ」

少し捕捉すると、元々うちは典型的な高志の平屋建て——つまりはアメリカの田舎カントリーのよライフスタイルうな生活習慣だった。具体的には地価が安いので、広い家を（母屋だけでなく、納屋も）持ち、畑と車と大きな冷蔵庫を具えている。そして、一週間に一度か二度、自家用車で郊外の大型量販店に行き、必要物資を大量購入しては、冷蔵庫や納屋で保管する。母が料理好きという事もあって、畑で採れた野菜が食卓を賑賑わす事も多い。……そんな生活だった。過去形なのは、祖父が他界し、祖母も介護施設に入ったからだ。自然、食卓も賑やかでなくなっている。

それでも、これらの条件は【彼女たち】を受け容れるのに好都合だった。何せ、部屋も布団も余っているので、寢床に苦勞する事はないし、食糧にも余裕がある。

——その点だけは『ホームステイ』受け容れも不自然ではないんだよなあ……。

加えて、【彼女たち】は、浴室などの衛生管理には神経質だったが、食事については寛容だった。僕の『喰えればいいや』という水準の料理も文句なく平らげてくれる。

しかし、これでは徐々に食糧事情が厳しくなってしまう。

何だかんだで核家族三人暮らしだったのだ。そこへ美少女が毎日三人ずつやってきた。父と母がいらないとはいえ、今や3-2+3+3+3で十人だ。しかも、皆成長期である。

「うーん、しょうがない。僕が学校帰りに買ってくるよ。何が食べたい？」

「食べたいモノ……ですか？」

そこで【彼女】はきよとんとした。そして、真剣な表情で考え込む。

——あれ、【彼女】もこんな顔をするんだ……。

僕はちよつと驚いた。【彼女たち】の例に漏れず、今まで美形過ぎて、人形めいた印象があつたのだ。そんな三つ編みお下げの【彼女】を僕は初めて個体認識した。

「あの、私がいに行つてはいけないのでしょうか？」

「き、君が？」

「はい。食糧だけでなく、衛生用品も補充したいので」

——……あー、この娘ら異様に綺麗好きだもんなあ。

隙あらば、我が家の掃除をしたがる。考えてみれば、この辺りも人間臭い。

「あなたには学校があるのでしょう？ でしたら、私がいに行つた方が合理的です」

三つ編みお下げの【彼女】は堂々と語った。しかし……

「その容姿で？ その格好で？」と、僕は返答せざるを得ない。「自己紹介でスリーサイズを答える君が買物に？」

「お嫌でしたか？ 思春期男子へは最善の自己紹介だと、メツサリーナ姉さまに教わったのですが……」

——…なるほど……『メツサリーナ姉さま』ねえ……。

「……あのさ、話変わるけど、君ら昼間何をしているの？」

「はい。基本運動と姉妹教導、そして、掃除です」

「掃除はともかく、基本運動って？」

「この場合は腕立て腹筋背筋屈み跳躍柔軟体操などです」

「……で、姉妹教導の方は？」

「姉妹教導は、先進国における学校教育と似た机上の学習です。ただし、教師の代わりに

【姉】が【妹】を教えます」

「あ、一学年数人の学校だと、あるらしいね。教える側も復習になって一石二鳥ってやつ」

——ただ、その場合、普通【姉】【妹】ではなく、【先輩】【後輩】になるはずだ……。

これが【姉】【妹】になると、全員が女性である事が当然の前提になってしまう。その上、血縁関係すら示唆している。

……僕はそこそこSFが好きで、科学雑誌なども人並みに読んでいる。

だから、その理由がなんとなく推察できて怖いのだが……。

——いやいや待てよ……。

「ごめん。また話を変えるけど、君らは外に出かけてはいないけど、部屋に引きこもっているわけでもないんだよね？ 今日までにご近所さんに見られたりしていない？」

「はい。掃除中、何度か見られていますか？」

「……マジかよ……」

僕は暗澹たる気分になった。我が家について、ご近所でどんな評判が立っているのか、考えるだけでも恐ろしい。

さらに僕へ追い打ちをかける出来事が起こる。

「38、ヴァイタルウェアの替えは？」
サテライト

金髪碧眼美少女の一人がそう言って風呂場から出て来たのだ。

産まれたままの姿で。

「ぎゃーーーーー！！」

だから、僕は叫んだ。

真っ白な肌が目に焼きつく。今まであのウェットスーツもどきを裸同然と貶していたが、それでも、肌を隠してくれていた。それを思い知らせる肌の白さだった。

おまけに……！ 豊かな乳房の先にある桜色が……！ 股の間にある肉色をした……！
——な、何で隠さないんだよ……！

そう、彼女は胸部だけでなく股間ですら隠そうとしていない。挙句……。

トゥエンティシックス

「26、予備はここに存在しない。よって、洗濯と乾燥が終わるまで全裸で待機」

「了解」

三つ編みお下げの美少女と、一糸まとわぬ美少女は、平然たる応答を続ける。

「ぎゃーーーーー！」

だから、僕は叫ぶしかなかった。

繰り返すが、【彼女たち】もメツサリーナさんも共通して、美形である。言い換えれば、造形に逸脱がない。だが、あえて、特徴を上げれば、やや釣り目の凛々しい細面だ。また、足が細長く、顔は小さい。繰り返すが、美形である。

その分、逆に中性的な印象もありえた。

つまり、美少女ではなく、美少年なのだと自分に言い聞かす事も出来た。【彼女たち】の硬質な言動もそれを補強していた。

だが、女の形にくびれた腰や麗しいお尻が、そんなまやかしを拭い去る。

そして、特に大きく美しい形の乳房が、そんな誤魔化しを吹き飛ばす。

「ぎゃーーーーー！」

だから、僕は叫び続けるしかなかった。

一方、【彼女たち】は何か奇妙なものを見る目で僕を見つめていた。

とりわけ全裸美少女は背筋を逸らし、何故か両手を腰にやり（この動きで胸が揺れて）、僕に不遜な視線を向けてくる。そういう事をする、ますます裸身が目立つわけで……。

僕は我慢できずにその場から逃げだした。

自室に籠り、僕は頭を抱える。

「あ、あんなのまで、ご近所に知られたら……！」

その時、僕の携帯端末が鳴った。発信元は昨日の着信履歴と同じ——メツサリーナさんからの電話だ。

僕は迷わず応答する。

「もしもし！」

『はい。こちらはメッサリーナ・マリオンです。富山君、調子はどうです？』

「もう限界です！ 助けて下さい！」

『…弱音が早いですね』

「文化が違い過ぎます！ 僕は健全な男子高校生です！ いきなりあんな美少女達と同居なんて、耐えられません…！」

僕が泣き言を零すと、メッサリーナさんは驚きの声を返す。

『あれ？ もしかして、性欲とかあるんですか？』

「あるに決まっていますよが…！」

「なんで、僕はこんなことを言わねばならないのか…。」

『え、でも…今の若い日本人男性は性欲が減衰していると聞きましたし、富山君って、オタクっぽいから、そういうの興味ないかなって…』

「その発言ツツコミどころ多過ぎだろ！ とりあえず、若い日本人男性と僕とオタクへの偏見を改めろ！」

大体、僕は初日に彼女たちを目にした直後、単独で再接触を図ろうとした。未知の不法侵入者を前に、逃げ出さなかった。警察への電話という発想に至るまでに、さらに数分を必要とした。どう考えても、相手が美少女だったからである。

——^{わか}天い女と書いて、^{あや}妖しい…！

古人がこのような会意を以って文字を作ったのもわかる。

^{わか}天い女性の美しさには、人間の正常な判断力を失わせる妖力があるのだ。

このメッサリーナさんについても同じだ。一昨日も昨日も今日も、何だかんだで、僕は彼女の言いなりになっている…！

『…意外ですなあ』

と、電話越しに問題の美女が呟く。

『富山君は三次元の女性に興味ないのかと…』

「僕に幻想持ち過ぎですよ…！ 何故かそんな誤解をされ易い事は認めますが…！ 本当に何故なんだ？」

「この際言っておきますが、僕も男ですからね。女の子は好きですよ。ていうか、大好きです。女好きです。だから、その対象は二次元三次元三次元を問いません…！」

『二次元？』

「活字という事です。僕はライトノベルも好きなので」

『ははあ。一次元デジタルデータも好きと……』

「はい。そして、少なくとも僕が人工的に創作された一次元や二次元の女性が好きなのは、農耕民族が人工的に生産された米や麦を好むのと同じ——つまるところは、対費用効率の結果でしかありません。それに農耕民族だって、全く狩りをしなかった訳ではない。狩猟採集を生活基盤としなくなっただけで、天然の肉を差し出されれば、食べたくなるものではないでしょうか？」

それも極上の肉なら尚の事だ。

『そういえば、日本では天然の魚が珍重されていますねえ』

「あれは養殖技術が未熟だった名残とは思いますが。でも、フランス料理にだって野^ジ生^ビ肉^エがあるでしょう？ 生憎、僕は食べた事ありませんが。いや、話が逸れてきましたけど、あんな美少女を前にすれば、僕だって……」

待て。さつきから、僕は何を言っているんだ？ 結局、電話の向こうにいるのだから、凄^シい^イ美^ミ女^メな^ナのだ。おかげで、胸が高鳴り、口はごもっていく。

だが、メツサリーナさんは笑わずに最後まで聞いてくれた。そして……、

『そうそう、最初に渡した五十万円——君は一円たりとも使っていませんね？』

「ヘタレで悪かったですね」

『勿論、そういう見方もあるでしょう』

「……」

『しかし、年頃の娘らを任せる身としては、その臆病さが好ましいです。君を選んだのは正しかったわけですね』

「……別に僕じゃなくても、今時の日本人なら大体は期待できると思うんですけど……」

『そうですか？』

「そりゃ、斜陽とはいえ先進国だから治安も悪くないし……」

『本当に？』

「……それは……」

中学の頃、やたらと僕に絡んできた不良生徒を思い出した。また、高志にも少ないとはいえ、路上生活者はいらる。彼らを生み出す貧困と冷酷が、この社会にもやはりあるのだ。

「……例外は否定しません」

『あの娘たちの価値を考えれば、その例外は無視できません』

「でも、僕である必要ありませんよ。せめて、女性に頼めば良かったのでは？」

『……』

「あのおう……？」

まさか、性別を考慮していなかったとか、そういう事はないだろうな？
だが、メツサリーナさんは落ち着いた声音で言う。

『ふっ、冗談ですよ。私もそうでした。が、【彼女たち】は純粹培養気味ですからね。この際、男性経験を積ませるべきとも思ったのです。これも社会勉強の一環ということ。』

「……父はホームステイと言っていましたか……」

『え？ あ、そういう設定でしたか？』

「……設定……？」

『いや、つまり、社会勉強の一環としてホームステイをするのです。高校数学という部分と集合ですね』

………。

「つーかさ、ホームステイ、ホームステイって、言っているけど、そもそも、あんたらはどこの国の人？」

『え、日本人ですよ。やだなー。だから、こんなに日本語ペラペラなんじゃないですか』
……いや、僕はもう突っ込むのに疲れたよ。

四日目

さすがに四日連続で美少女がやってはこなかった。

ついでに言えば、僕の方でも彼女達をそろそろ見分けられるようになってきた。何事も慣れである。ただ、顔立ちは似過ぎているので、背丈や体付き、髪形や装飾品？を基準にする必要がある。

自己紹介順に並べていくと……

「私はエムピービー・サーティエイト十五歳。身長159センチ体重45キロ。スリーサイズは上から82・57・84、65のCカップです」

おそらく、MP-B38。腰まで届く長い三つ編みを、二つ結びのお下げにしている。だが、表情は【彼女たち】の中でも特に硬く、幼げな可愛らしさと凛々しさを兼ね備えている

「私はエムピービー・フォーティフォー十四歳。身長164センチ体重47キロ。スリーサイズは上から85・58・84、65のDカップです」

おそらく、MP-B44。まだ十四歳だが、背が高く……スタイルもいい。彼女もお下げだが、まっすぐに伸ばした二つ結びのお下げだ。何故か眼鏡を希望し着用している。

「私はエムピービー・ファイティワン十三歳。身長152センチ体重39キロ。スリーサイズは上から75・54・77、65のAカップです」

おそらく、MP-B51。【彼女たち】の中では幼い体つきで、胸にもわずかに陰影がある程度。ぼさぼさおかつぱで、大人しそう。後述する MP-B52 と瓜二つ。残りはそちらで書く。

「私はエムピービー・ナインティーン十七歳。身長171センチ体重51キロ。スリーサイズは上から89・59・89、70のEカップです」

おそらく、MP-B19。逆に最年長の彼女は【彼女たち】の中でも、一番の長身で…、はつきり言おう。それに相応しい巨乳。髪形も含めメッサリーナさんに最も似ている。

「私はエムピービー・トゥエンティスリー十六歳。身長161センチ体重47キロ。スリーサイズは上から87・59・87、70のDカップです」

おそらく、MP-B23。はい。彼女も巨乳系です。そしてセミロング？（僕は女性の髪形にはまるで無知）の髪に鉢巻きを付けている。【彼女たち】の中では珍しくお転婆娘っぽい。

「私はエムピービー・ファイティツー十三歳。身長151センチ体重38キロ。スリーサイズは上から73・54・77、65のAAカップです」

おそらく、MP-B52。前述した通り、MP-B51 と瓜二つ、おまけに挙動がそっくりな上、行動も共にするので、正直識別不能。さらにこの二人、とっ・つ・も・仲・良・し・さ・ん・で・あ・る。

「私はエムピービー・トゥエンティシックス十六歳。身長154センチ体重43キロ。スリーサイズは上から88・58・84、65のEカップです」

おそらく、MP-B26。メッサリーナさんの言っていた『巨乳』候補。肩までのシャギーショートで、少年にも見えるが、巨乳。なお、凄く生意気そう。この台詞も嫌々っぽい。

「私はエムピービー・ファイティエイト十三歳。身長149センチ体重40キロ。スリーサイズは上から80・55・82、60のDカップです」

おそらく、MP-B58。メッサリーナさんの言っていた『ロリ巨乳』候補。つまり、幼く、背も低いが、巨乳系。しかもツインテール。生意気そうな娘第二弾。この台詞も嫌々…。

「私はエムピービー・ナインティセブン十歳。身長135センチ体重30キロ。スリーサイズは上から62・47・64、55のAAAカップです」

おそらく、MP-B97。メツサリーナさんの言っていた『ロリ』候補。直毛ストレートヘアが多い【彼女たち】の中では珍しくふわふわの長髪。性格も幼く、この台詞も一生懸命という感じ。

となる。勿論、憶えなくてもいい。僕だって、携帯端末の備忘録に書いておいただけだ。暗記していない。そもそも、いきなり九人も憶えられるはずもない。これがライトノベルなら、間違いなく減点要素だろう。

また、誤解されると困るので補足しておく、スリーサイズ云々は僕が尋ねたわけではない。彼女たちの一覧表を作ろうと思って、名前を尋ねたら、勝手に言っただけだ。特にトウエンティックス ファイティエイト、26と58、こっちは名前を聞きたいだけだ。嫌な顔をするなら、そんなことまで喋るな。

……とはいえ、幾つかわかった事もある。

「これさ、番号の一桁目が世代か何かを意味していない？ 例えば、十番台は第一世代で、皆十七歳とか？」

「……はい。その通りです」

三つ編み二つ結びお下げだから、38||サーティエイトはやや驚いた顔で答えた。

そんなに僕って、間抜けに見える？——と思いつつながら、質問を重ねる。

「重ねて質問、顔容かおかたちは完全にそっくりなのに、髪形とかは結構バラバラだね？ これ、わざと？ 眼鏡なんて、多分伊達だよだね？」

「はい。我々の伝統です」

「伝統？」

「オリジナル||サーティックス以来、個体識別が困難になった時の伝統です」

「……《オリジナル||サーティックス根源三十六体》……って、宇宙飛行士かよ」

「関係としては似ています。最初の三十六名は先駆者として、未知に挑んだが故、大量の問題点に直面し、また同時に解決策を考案しました。そのデータとノウハウを受け継いでいるが故、後発の我々はこのように円滑に物事を進められるのです」

「個体識別のために、髪型や装飾であえて差異をつけるのも、その一つ？」

「はい」

——……先駆者が問題点を洗い出していたわけだ……。

考えてみれば、当たり前だ。この九人が『プロダクションモデル量産型』である以上、対応する『テストモデル試験型』の

類が存在してしかるべきだ。

その『テストモデル試験型』がどんな問題に出くわしたのかはあまり考えたくないが……。

「サーティエイト」そこで、少女の一人——多分ナインティーンが口を挟む。「発言を控えるべきです。部外秘に抵触しつづあります」

「はい。申し訳ありません。ナインティーン姉さま」

——……しっかし、こんな調子で大丈夫なのかな？

今日は土曜だ。

平日なら、学校へ逃べられた。いや、学校は学校で、メツサリーナさんとの関係を聞かれて困ったが、正直に『父の仕事の関係』と言っておけば、ギリギリ誤魔化せた。

しかし、今日は土曜で休日だった。

衛生用品や食料物資も金曜の夕方に補充を終えている。

——部活でもやっていればよかつたなあ……。

あるいは土曜補修でもいい。いずれにせよ、【彼女たち】とずっと顔を会わせ続けるのは正直辛い。勿論、美少女と共に過ごすのが、楽しくないわけがない。だが、四六時中一緒では、さすがに肩がこる。それがこの三日でわかった。

——共同生活をしている以上、鼻歌も歌えないし、身嗜みも気をつけなきゃいけない。食事の時だって、箸使いや咀嚼音に注意しなくてはいけない。

別に文句を言われるわけではない。むしろ、【彼女たち】は淑々たる美少女で在り続けている。それが【彼女たち】の立ち振る舞いの見事さを示している。……そして、同世代のそんな姿を見せつけられれば、僕だって気負わざるを得ない。

だから、この状況が続くと、精神的に参ってしまう。

それに……

「君らも、このまま家の中という訳にもいかないだろうしなあ」

「何故です？」

「何故って……ずっと屋内だと君らも辛いだろう。外の空気が吸いたいとは思わないの？」

「いえ。外出の必要はありません」

「……？」僕は疑問に思い、他の【彼女たち】に尋ねる。「ええと、サーティエイトはこう言っているけど、外へ出たい人は？」

総勢九人になった美少女達は、しかし、皆一様に沈黙を貫いた。

——これも異常だな。

勿論、【彼女たち】が異常でないと思つた事など一度もない。ただ、一応会話が成立す

る事といい、これで意外と常識的な部分も多い。しかし、これは非常識な部分に数えられるだろう。

何しろ、最初に来た三名は既に三日も外に出ていない。引きこもりがちな僕から見ても、出不精が過ぎる。

——これはやっぱりそうなのか？

「君らはこの三日間、基本運動を欠かしていないよね？」

「はい。腕立て腹筋背筋屈み跳躍柔軟体操などです」サーティエイトは以前の台詞を繰り返した。「御覧になりますか？」

「いや、それはいい」

凄く見たいけど。

こんな体の線が出る薄着で、美少女達が動き回るのだから、当然見たいけど。

しかし、聞くべきなのは……

「走り込みはやらないの？」

「屋内では難しいので、最近は何も行っていません。そろそろ、対策を考えねばなりません」

「屋外に出てやろうとは思わなかったの？」

「あ……」そこで、サーティエイトは口を開けた。「なるほど。では、さっそく……」

「いやいやいや、待って……！」

こんな恰好の美少女達が外で走っていたら、絶対大騒ぎになる。

そう思って制止し、同時に僕は一つ指摘した。

「ねえ、やっぱり君ら、外に出た事、あまりないでしょう？」

「い、いえ、それは……」

「部外秘なら答えなくてもいい。勝手に言わせてもらう。君らは屋内で育てられた。走り込みなんかも体育館か何かでずっとやっていた。だから、ずっと家の中でも平気で、逆に外に出て運動しようとも思い付かなかったんだ」

「……」

サーティエイトは沈黙した。

これも考えてみれば、当り前だ。実際、僕自身、外での走り込みを止めた。おそらく、【彼女たち】の育ての親も同じ判断を下したのだ。

しかし……

「ていうか、部外秘を守る気あるの？」

僕はとうとう毒づいてしまった。

部外秘——話が弾みそうになると必ず出てくる障害、僕の気疲れの要因に苛立っていた

のだ。

「僕は先進国で育って、今は高等教育を受けているんだよ。この条件で、君たちの正体を推察しないでいられると思う？」

妄想や願望を以って、現実を変える。人間の進歩はその繰り返しだ。歴史がその過去の記録であるなら、SFはその未来の予測である。実際、SFで予言され、遠からず現実のものとなった技術は数限りない。

そして、「彼女たち」の存在はその中でしばしば取り上げられ、僕はそんな予言書が好きなのだった。

「僕は高一のガキだ。社会経験に乏しい。でもそれだけに、純粋な論理思考や科学知識に発想が偏らざるを得ない。行政制度は大人の方が精通しているけど、四則演算は学生の方が早いし、昆虫や恐竜については子供の方が詳しいものだろう？」

だから、この時点で……いや、初日の時点で「彼女たち」の正体は推察済みだった。その事を仄めかす。すると……。

美少女は俯いて何も答えなかった。

「……ごめん。君らに言っても仕方なかったね」

——まずいな。メツサリーナさんが早く来てくれないと……。

僕は結構本気で焦っていた。

五日目

「へえー、それはお疲れ様でした」

翌日やってきたメツサリーナさんは愉快そうだった。

長身痩躯な金髪碧眼、相変わらずのライダースーツもどき、巨乳を見せびらかすようにフロントジッパーを臍まで下げている。

「いや、冗談ではなかったんですが……」

僕は我が家の茶の間で、一人、居心地の悪さを覚えていた。昨日はあれ程メツサリーナさんを待ち望んだ。ところが、いざ相対するといったたまれなくなる。

理由の一つは例によって、メツサリーナさんが色っぽい美人さんである事。

もう一つは「彼女たち」が皆一様にメツサリーナさんを取り囲んでいる事だ。子猫のように懐いている少女もいれば、露骨に頬ずりしている少女もいる。僕には刺々しい

トウエンディングス フィフティエイト 2 6 と 5 8 や、お姉さんっぽい 1 9 と姉御肌な 2 3 は、さすがに密着してないものの、付かず離れずを保っている。

——『僕の家の居候が金髪碧眼姉妹ハーレムで以下略』……かよ。

そんな下らない事を考えていると、フォーティフオー 4 4 がお茶を淹れて運んできた。補足しておく、仮初にも客人へのお茶である。当然、僕は自ら淹れようとはした。しかし、美少女九人も競って、お茶を淹れたがり、最終的に 4 4 がその権利を獲得したのだ。

そして、メッサリーナさんは美少女の淹れたお茶にニヤニヤしながら、僕に言う。

「しかし、そんなに辛かったんですか？」

「そりゃ、何日も二人きりでいるんです。熱愛中の二人でもない限り、互いに気が立ってくるものでしょう？」

「【彼女たち】は九人いますよ。別に二人きりではなっただけですが？」

「それは……」

考えてみれば、その通りだった。メッサリーナさんはさらに言葉を重ねる。

「富山君はボーイスカウトをやっていましたね？ 合宿で集団生活への耐性は身につけているはずですよ」

メッサリーナさんは僕の経歴を知っていた。もともと、今さら驚く事ではないが……。「なのに【彼女たち】との共同生活は耐えられなかったのですか？ その理由は？」

「……異性の、しかも、同じ年頃の美少女だったから……でしょうか？」

自分で言いながら、おかしな話だと思った。実際のところ、ボーイスカウト時代も人間関係の摩擦は色々大きかった。生活習慣の違いでも衝突する事は多く、睡眠不足で苦しんだ事は一度や二度ではない。

それに比べれば、【彼女たち】は居候だけあって、僕の習慣を尊重してくれる。テントと違って、物理的な生活空間自体に余裕がある。言われてみれば、僕の苛立ちは過剰な気がする。とすると……。

「皆同じ顔なので、ずっと同一人物と一緒に気がして……っていうのもあるかもしれません」

「なるほど。では報告書に挙げておきますね」

「……あの、僕、おかしいんでしょうか？」

「いえ、マスターの時に……過去にも似た事例はあります。だからむしろ、それが正常な反応ですよ」

メッサリーナさんはまるで聖職者のように僕を宥める。

「富山君の安心のために言っておきますね。過去の事例でも初期には『ずっと同一人物と

「一緒な気」があつたようですが、数日で雲散霧消してます。いくら金髪碧眼美少女という共通点があつても、結局は一人一人違う人間ですから。慣れれば、個体識別できるようになるんですよ」

「言われてみれば……」

たしかに四日目あたりから、徐々にだが、「彼女たち」の個体識別ができるようになってきている。

——結局、僕の『コーカソイド系美少女との接点不足』説も、誤りでなかった？

例えば、日本人も朝鮮人も中国人も同じモンゴロイドだ。そのため、西洋人の目には皆同じに見えるらしい。ただし、この三者はそれぞれ別の民族である。だから、西洋人にはわからずとも、当事者達には違いがわかる。そして、西洋人のような部外者も、当事者と共に過ごしていれば、次第に違いがわかるようになる、僕にも同じ変化が起こりつつあるのかもしれない。

しかし、これは……

「もしかして、僕の意見が聞きたいんですか？」

「話が早いですね」メツサリーナさんは微笑む。「彼女たち」を預かってくれた恩もあります。質問にもお答えできる範囲でお答えしますよ」

「じゃあ、言わせてもらいますよ。【彼女たち】はやはり異常です」

「具体的には？」

全部！——と言いかけて、具体的でない事に気づき、僕は初日の疑問を繰り返す。

「初対面の男子へ、スリーサイズを豪語する女の子がどこにいるんですか……?!」

「ないなら作る。足りないなら補う。いないなら育てる」メツサリーナさんは歌うように言う。「それが人間であり、努力であり、教育です」

「教育？」

「ええ。あなたも、読み書き算盤そろばんができ、自分の身長体重年齢を定量的に把握しているでしょう？ 千年前では考えられない事です。でも今はその程度の人材はざらです」

いや、千年前の日本に算盤はない——と返そうとしたが、言いたい事はわからないでもない。昨日いなくても、明日はいるかもしれない。そして、いるように努力する事こそ、人間の教育と言いたいのだろう。……方向性はともかくとして……。

「付け加えると、スリーサイズを豪語する事そのものよりも、豪語できるスリーサイズを維持する事を目標としていました。……あとは、ドクターは御自分が貧乳だから、巨乳に憧れていたというのがあると思います」

そして、メツサリーナさんは腕を組み、胸の谷間を強調する。

すると、九人の金髪碧眼美少女はキャーキャーと騒ぎ出した。

メッサリーナさんは露骨ににへらにへらしつつ、両手に持った紙袋の片方を差し出す。

「はいはい。では、ブライドリースール【妹】諸君に朗報です！ ヴァイタルウェアの替えですよー！」

何故フランス語？——という僕の疑問を放置して、九人の金髪碧眼美少女は「お姉さま素敵！」とその紙袋に群がった。

——……キヤラ変わり過ぎだろ……！

僕は心の底からツツコミたかった。

とはいえ、着替えをありがたがる気持ちはわかる。何せ、【彼女たち】は最初に着ていた『ヴァイタルウェア』とやらを使い回していたのだ。僕が衣服を都合しようかと提案しても、九人の【彼女たち】は首を横に振るのみだった。ウェットスーツもどきに拘る理由はわからない。が、初日組などは最低五日も同じものを着続けている事になる。ただでさえ、綺麗好きな連中だ。洗濯しているとはいえ、そろそろ着替えが欲しいのも無理はない。（ちなみに、三日目にあった『ヴァイタルウェア』云々のやり取りとまったく同じものが二日目にもあったという。ただ、二日目は僕が早めに登校したために、出くわさなかったらしい。……ざ、残念とか思ってはいなんだからね……！）

そして、金髪碧眼美少女達は皆、己のヴァイタルウェアに手を伸ばし……

「いやいやいや、**だから何で脱ぐの？!**」

「着替えです」ナインティセブン 9 7（多分）はそう言いながらも脱衣行動を止めはしない。

「僕がいるんだよ！」

しかし、僕の叫びは無情にも無視され、【彼女たち】九人は一斉に丸裸になる。金髪碧眼美少女達の湯気も水滴もない肌が露わになる……！

「……っ！」

仕方なく、僕は後ろを向いた。茶の間を出ればいいのかももしれない。だが、ここは僕の家だという意地もある。

一方で、メッサリーナさんは「いやあ、絶景かな絶景かな」と全裸美少女達の着替えを嘗め回すように観察していた。

……色々悔しいので僕は皮肉の一つも言いたくなる。

「……これもプランとやらのせいですか？ さしずめ、裸の身体を見せつけるのではなく、見せつけるに足る裸の身体を維持する事が目標だと？」

「それもありますし、集団生活への適性という面もあります。加えて、宇宙飛行士は裸に

なるのも仕事の内でしよう？」

メッサリーナさんは奇妙な事を言った。

宇宙飛行士は裸になるのも仕事の内——実は初めて聞いた言い回しだ。が、それこそ、意味は推察できる。多分、健康管理と記録採取のためだ。宇宙へヒト一人を送り出すには莫大な費用が要る。となると、途中で倒れられては困る。しかし、宇宙へ行くには未知の危険が多い。また採れる記録は採っておきたい。だから、職務中、宇宙飛行士は間断なく医師に監視されている。僕らはたまに精密検査を受ける時だけ、服を脱げばいいが、宇宙飛行士は常に精密検査を受けているも同じなので、しょっちゅう、服を脱がねばならない。そういう事だろう。

——それはわかる。てことはやつぱり……、

僕がぐるぐる考え込んでいると、メッサリーナさんはあっさり言葉を補ってくれた。

「我々《マリオンプラン》の産物も同じなんです」

「我々って……メッサリーナさん自身も《マリオンプラン》とやらの産物なんですか？」

「はい。お気づきになりませんでしたか？」

いや、見た目がそっくりだし、そういう事もあるかなとは思っていましたが……。

「……え、じゃあ、そもそも、《マリオンプラン》って？ あなた方は？」

「それこそ、薄々お気づきなのでは？」

メッサリーナさんは悪戯っぽく問い返してきた。

僕は大きく息を吸った。そして、初日の時点で推察していた「彼女たち」の正体を口にする。

「では、お尋ねします。——**あなた方は「設計された赤ん坊」**なのでは？ いえ、単なる

生殖細胞分枝体クロソーンなのかもしれないが……」

「はい。ご推察の通り。**私はヒト受精卵内核遺伝子操作計画《マリオンプラン》——その**

初期被験者《根源三十六体》オリジナルサイティシックスの一人。……そして、「彼女たち」はそのB系列量産型です。文字通りの意味でね」

メッサリーナ・【マリオン】はいつもの綺麗な声で語った。

「もつとも、私自身最近まで量産計画が始まっていたと知らなかったので『オリジナル』なんて自覚はありませんでしたけど。この宇宙飛行士っぽい名付けネーミングもマスターの趣味で、つまりマスター参加以降のもの。実際、《タマゴロモ》による生体管理のように、目的も手段も宇宙飛行士と共通する部分が多いので、名称の流用も円滑だったんです」

僕はふらついていた。

空想に現実が追い付いていた。つまりはそういう事だろう。そして、
——母さん達が中々帰ってこないのはそのためか……。

と、奇妙にも卑近な発想がまず頭に浮かんだ。

つまり父の配慮だ。既に痴呆の祖母は勿論、母もこの問題に向いているとは言い難い。何しろ、母は『キリンだつてね。昔から、首が長いわけではなかったわけではないの。高いところにあるものを食べるために頑張ったから、首が長くなったの。だから、英語が苦手な中道も、頑張れば、必ず英語が得意になるわよ』と言って、十二歳だった僕を絶句させるような人だ。

あの時、父は嘲る様に苦笑しただけだった。が、今回は苦笑するだけでは済まないかもしれない。何せ、母は善良で教育熱心なわりに、獲得形質と遺伝形質の違いも曖昧なのだ。勿論、世の中、知識より果敢さが適切な事は多い。母が意外と【彼女たち】と上手くいく可能性もある。ただ、それらを加味してもなお、母と【彼女たち】はまだ会わせるべきでない——と父は判断を下し、根回しをしたのだろう。

——しかし、僕なら、大丈夫なのか？ いきなりこんな場面に直面しても！

「あれ、どうしました？」

メッサリーナさんは怪訝な顔をした。

「そんなにびっくりしました？ ご自分で推察した結果でしょうか？ 予備知識もあつたのでは？」

「……予備知識があるから、びっくりしているのです。案外、何も知らない方が自然体で向き合えたかも……。例えば、母なら、只の人工受精児との区別が付かずにより自然体で……」

「それは最初に却下されました」

メッサリーナさんは珍しくぴしやりと言った。

「無知の肯定はあつてはならない。【彼女たち】には自覚と自制を兼ね備えた人間と触れ合つて欲しい。——というのがドクターとマスターの共通見解でしたから」

……どうもその『ドクター』と『マスター』というのが【彼女たち】の上にいるらしい。「それに大した事をやっている訳ではありませんよ。たしかに我々【マリオン】は受精卵段階で全面的な遺伝子調整を受けています。が、あくまでも『調整』です。特殊な器官はおろか資質すら皆無。むしろ、不安定要素を異常と見做し、排除し尽くしたという意味で、我々【マリオン】は究極の凡人と言えます」

「凡人って……こんな美少女揃いで？ あの金髪碧眼も……遺伝子操作の結果？ いや、

表現型のマーカードとしても……」そこで、僕は思い直す。「いや……むしろ、平均値をとったから美少女揃いになった？ それに後天的な教育も包括している？」

「なんだ。ちゃんとわかっているじゃないですか」

メッサリーナさんは僕のつぶやきに安堵したようだった。

「その通りです。【マリオンプラン】は単なるヒトの遺伝子操作計画というより、包括的な次世代人材育成計画としての側面が強いですね」

「……………」

僕は尋ねたい事だらけで、かえって口が回らなかった。

逆に、メッサリーナさんは余裕たっぷりと言う。

「では、B系列量産型の部外秘指定を緩和しておきます。以後の質問は【彼女たち】へ、直接お願いしますね」

これで技術的詳細や一部機密はともかく、プランの概要は教えてもらえるという。

(もつとも先に述べた通り、ド素人の僕が技術的詳細を聞いてもわかるはずがないが)

「……その前に、あなたがお持ちのもう一つの紙袋の中身を聞いてもいいですか？」

「ああ、これは……」と、そこでメッサリーナさんはやりと笑った。「いえ、秘密にしておきましょう。じきにわかりますから」

じきにわかるというのは嘘ではなかった。実際、僕も翌日にその中身を知る事になったのだ。

だが、この際なので、ネタばらしをしておこう。

もう一つの紙袋にあったのは高志中部高校——つまりは僕の学校の——女子制服だった。

六日目

月曜日。

「私はエムピービー・サーティエイト十五歳。身長159センチ体重45キロ。スリーサイズは上から82・57・84、65のCカップです」

朝礼の最中、僕は教室の机に突っ伏した。

——やりやがった。この連中……！

三つ編みお下げの金髪美少女——サーティエイトは高志中部高校のブレザーとプリーツスカートで、教壇に登り、『留学生』として、自己紹介をしたのだ。

その時の狂乱は当然筆舌に尽くしがたい。僕はもう見慣れてしまった——人間、贅沢に慣れるのは早いのだ——が、【彼女たち】は本当に美少女なのだ。

だから、第一にその美少女っぷりで騒がれた。

「凄い綺麗…：鋭利な双眸って、ああいうのを言うんだ…：」

「でも、凛々しい顔の割に、三つ編みお下げ…：ちよつとロリータだよねえ？」

「手足細っ！ しかも長っ！ 洋の東西いいとこどりっ！？」

「うん。おまけに引き締まっている。まるで草食動物…：陸上部に来てくれないかなー」（考えてみれば、僕はまともな格好をした【彼女たち】を見たのはこれが初めてだった、ヴァイタルウェアなるぴっちぴち衣装か…：裸しか見た事がない。だから、身体の線が出ない濃紺一色の制服姿に新鮮さを覚えていた）

第二に、金髪碧眼という日本人離れた容姿で騒がれた。

「いわゆる明るい金髪？…：初めて見た。おまけに枝毛ゼロって感じ？」

「あの金髪、地毛だよね？ しかも、編み込んでなお、腰まで届くって…：」

「え？ 碧い眼？ うわ、金髪碧眼って、どんだけ希少なの！？」

「そう言えば、木曜日に来た胸出しのお姉さんも金髪碧眼だった気が…：」

（さすがに気付くよなあ）

第三に、サーティエイトがスリーサイズまで語った事で騒がれた。

「ウエスト57！？ これも細っ！ おまけにアンダーは65かあ…：」

「え、凄いのか？」

「そりゃ、グラビアアイドルとか、アニメヒロインには多いけどさ。あーいうのは、基本でっちあげ。普通の女の子はもつとあるよ。私なんて…：って、ヨウジ、照れてる？」

「ち、違げーよ！」

（リア充どもめ…：！）

第四に、同時に加入してきたらしい他の『留学生』との関連で騒がれた。

「聞いた？ 二年と三年にも似たような娘が来ているってさ」

「それどころか、付属中学の方にも来ているらしいぜ」

「エムピービーって名前の金髪碧眼？」

「じゃあ、親戚？ それとも、姉妹？」

（ちなみに僕は、他の学年の事など全く知らず、他の『留学生』の存在を知らなかった。しかし、事ここに至っては、他の『留学生』が【彼女たち】の残り八人である事は想像に難くない）。

そして、最後に【彼女たち】の出自に関する話題で騒がれた。

「え、じゃあ、エムピービーが家族名って事？」

「家族名が先なの？ パツと見、西欧人なの？」

「日本に合わせたんじゃない？ 欧米でも公共の場では、家族名を先にする事が多いし」「元々ハンガリーなんかは、東アジアみたいに家族名＋個人名の順番らしいけど……って、『MPB・THIRTY EIGHT』って、バリバリ英語だよね？」

これについてはサーティエイトが直々に答える。

「私は東欧系の少数民族——御存知ないでしょうが、『アーデルハイト公国』出身です」「ああ。それでかー」

と、善良なる高志中部高校一年二組生徒諸君は納得してしまった。

——出たよ。東欧系……！

東欧諸国はこういう時に便利なのだ。日本と縁が薄いので、ファンタジーな設定を出されても、検証する術がない。人種も坩堝なので、金髪だろうが、銀髪だろうが、あり得る。また、『ソ連崩壊のゴタゴタで、こんな珍妙な国になってしまったのです！』と言われれば、反駁が難しい。

念のため、僕は隠れて携帯端末で検索する。すると、『アーデルハイト公国』で何件か見つかった（なお、ウェブページに公開されている更新日時はここ数十年に集中しているわりに、外部検索エンジンで調べると更新日時はすべてここ一週間以内だった）。

『ソ連崩壊の悲劇！ 東欧の秘国！ 『アーデルハイト公国』！』

『世界有数！ 金髪碧眼の宝庫！ 『アーデルハイト公国』！』

『『アーデルハイト公国』に見られる大家族制の考察』

『『アーデルハイト公国』がいかにして、英語を公用語とするに至ったのか？』

——『NEXT』かよ！

僕は叫びたいのを抑えるのに必死だった。

ちなみに『NEXT』とはマイケル・クライトンのSF小説である。

その中に遺伝子操作で生み出されたヒトとチンパンジーの交雑体『デイブ』の話がある。人情家の夫婦が交雑体『デイブ』を匿^{かくま}い育てるために、架空の遺伝病の記事をネット上ででっちあげる——というあらすじだ。

遺伝病ではなく、公国という違いがあるものの、これらの記事には同じ効能がある。

おそらく、高志中部高校生徒の中には【彼女たち】の出自に疑念を抱き、独自に調査を始める者もいるだろう。しかし、その場合もこの記事で納得できてしまう。疑念は残るが、追求する手間が惜しくなる。実際、少数民族の記事など数件しか見つからないのはざらだ。独立国家ではなく、公国ならば、尚の事。

——それに『アーデルハイト公国』が実在して、そこに【彼女たち】の遺伝子提供者がいても、不思議じゃないしな……。

そこまで考えて、ゾツとする。

——…：必要なのは遺伝子よりもむしろ子宮か？

メツサリーナさんは『人材派遣会社マリオン・カンパニー』と言っていた。だが、人材派遣と人身売買は常に紙一重だ。機動警察パトレイバー漫画版の頃からそうだった。

とりわけ経済的貧困と政治的混乱が重複している東欧はまさに絶好の箇所だろう。しかし、僕の内悩は別のものにとって代わる。

「では、サーティエイトさんの座席は…：」

と、先生が考え込んだ時の事だ。

「トミヤマ・ナカミチ？ 何故ここに？」

美少女サーティエイトのその一言で、教室の雰囲気はさらに騒然となった。

生徒の視線は僕に集まり、先生はサーティエイトに問い質す。

「君は富山と知り合いかね？」

「はい。私は彼と同居中です」

——ああああ、この、ダムIIプロント金髪馬鹿！ 余計な事を！

「ど、同居中？」

さすがに驚く先生は、生徒の声を代弁していた。だが、サーティエイトは平然と返す。

「イエス。【私たち】は彼の家に住まわせてもらっています」

「ほ、ホームステイ先という事か？ そんな話は聞いておらんが…：」先生は首を傾げる。

「ま、まあ、連絡の不備だろう」

——先生も！ 納得しないで下さいよ！

「ちょうどいい。サーティエイトさんの席は富山の隣にしよう。富山、彼女に色々教えるやるように」

「あの…：それは…：」僕はさすがにそこで声を上げたもの…：

「何か不都合な事でもあるのか？」

「…：いえ、ありません」

でも、**【彼女たち】は色々おかしいんです**——と言う勇気が僕にはなかった。

「あー、時間が推している。朝礼の続きを始める」

朝礼と並列して、サーティエイトは座席へ移動する。

ついでに言えば、生徒は担任教師の朝礼よりも、目下の関心事——つまり、僕と彼女に視線を集中している。

さらにサーティエイトは椅子に座った途端、首をこちらに伸ばしてきた。そして小声で、「トミヤマ・ナカミチ、何故、あなたがここにいますか？」

「それはこっちの台詞だよ……！」

てか、顔近い。文字通りの美貌が吐息のかかる距離にある。それに朝礼中に私語は……と言いかけたが、先生は不問だった。どうやら、先程の『富山、彼女に色々教えてやるよ』の範疇という事らしい。

「？ トミヤマ・ナカミチ、顔が赤いですよ。汗も多い。どうしました？」

「誰のせいだと……！ ……いいや、そんな事はどうでもいい。僕がここにいるのは僕がこの生徒だからだ。で、君は何故、僕の学校にいる？」

「ですから、留学です」

「……その設定、まだ続けるの？」

「設定？ 何のことですか？」

「………」

「トミヤマ・ナカミチ、何か妙な妄想をいませんか？ 我々は社会勉強の一環としてここ高志市に留学し、この高志中部高校に転校しただけの話です。これは正当かつ正式な手続きです。実際、四日前にもメツサリーナ姉さまが来ていたはずですよ」

僕は先週木曜の事を思い出した。

あの時、メツサリーナさんは転入手続きのため学校に来ていたという事か？

「……質問を変えよう。留学はいいとして、この高校を選んだ理由は？」

「深い理由はないそうです。この辺りで最も偏差値の高い高校を選んだだけで」サーティエイトはあっさり言う。「だから、あなたがいて、驚いたのです」

「……そこで驚く理由は？」

「いえ、あなたは頭がよくなったのだと……」

僕は受け答えに迷った。

この高志中部高校はたしかに進学校だ。合格通知が来た時、母の喜びようは半端ではなかった。が、所詮田舎の進学校である。第一、最近の優秀な学生は都会の進学校に行く。実際、中学時代の親友も今では東京にいる。また、そもそも僕が滑り込めたのは少子化の影響が強い。今や高志中部高校といえども、炯眼商会の会長がいた頃とは違うのだ。だから、僕の頭の出来はさほどでもない。

が、サーティエイトの物言いは気になった。

中学の頃、ある女子生徒に成績を尋ねられた事を思い出したのだ。あの時、僕が正直に『学年五位』と答えると、彼女は僕を嘔吐き呼ばわりした。その上で教師の口から、僕の学力がおぼろげに証明されると、今度は『本当の頭の良さ』がどうのこうの言われ、『記憶力だけで、本当の頭の良さが無い』とか、訳の分からない事を言われたのだ（なお、僕は暗記が苦手だ。得意の数学ですら、定期試験ではしばしば公式を忘れて、その場で導き出したりしている。逆に、英語の成績が劣悪なものも単語が覚えられないからである）。

「……サーティエイト、君の偏差値は？」

「日本の一般的な高校入試基準で70でした」

「……ふ、ふーん」

完全な余談だが、僕の偏差値は64だった。

六日目

「だから、何度も説明しているだろう」

僕は休み時間になった途端、生徒に囲まれていた。

「皆の推察通り、【彼女たち】九人は先週木曜に来たメツサリーナさんの親類縁者らしいらしいというのは、僕も詳しい事は知らないから。【彼女たち】がうちで寝泊まりしているのは事実だけど、部屋を貸しているだけで、本質的には僕と無関係だからね」

「無関係って事は無いでしょ。一つ屋根の下で住んでいるんだから」

「それはうちみたいな田舎の平屋建て一軒家をわかっていないんだよ。地価が安いから、平面的に拡張するのは簡単にできる。だから、昔は結婚や出産の度に、別棟を建てては、廊下で繋げ、新しい家族のための部屋を用意するのは珍しくなかったんだ」

「あー、そーいや高志って、持家敷地面積日本一だったっけ？ 私はマンション住まいで、実感なかったけど」

「うちは田圃の中の一軒家、その敷地面積日本一の典型。爺ちゃんはその辺り古い人で、余剰資金ができる度に家を広げていった。仏壇や客間のために増築したりしてね。それで、少子化過疎化の今では使っていない部屋一杯。【彼女たち】はそこへ入って貰っているの。だから、同居と言っても、アパートの別室ぐらいの関係」

「うーん、でもさ、水回り系は簡単に増やせないよね？ 電気通信網と違って、ケーブル伸ばすだけでは済まないんだから」

「たしかにそうだ。うちも富山と同じ広い一軒家で、無駄に部屋はあるけど、風呂場みた

いな水回り系は一か所しかない」

「そ。つまり、お風呂は共用ってわけだ？」

鋭い指摘をしてキヤーと騒いだ生徒が女子だったのは幸いだった。

「ごめん。それセクハラだから」

と僕は努めて冷たく断じる。女子生徒は一瞬黙ったが、すぐその論理の間隙を衝く。

「なら、質問を変える。水回りが増やせない以上、台所も共用のはずよ。つまり、食事と一緒に食べているんでしょう？」

「それは……」僕は思わず言い淀んだが、ここは認めるしかない。事実である以上、仕方がない。これまでの弁明と同じだ。「君の言う通りだ」

「へえー？」

女子生徒は勝ち誇ったように笑う。

「で、でも、勘違いしないで欲しい。元々父さんが仕事の関係で外の人を招く事も、その人達を家に泊める事も珍しくなかったんだ。爺ちゃんが家を大きくしたのはそのためもある。これまでに何度もあった事だよ。だから、今更【彼女たち】のホームステイなんて……」

「その割に【彼女】に懐かれているじゃない？」

「……」

僕は黙らざるをえなかった。

この一連の会話に嘘は混せていない。僕だけでない。級友の言葉にも嘘は無いだろう。露骨に事実反する発言を行い、信用を損なう程、自分も級友も愚かではない。

そう……何故かサーティエイトは、僕の傍らにいた。

隣の席だからというのものもある。しかし、何故かサーティエイトは弁明しようとしな

級友諸君が彼女ではなく、僕を質問攻めに行っているのは、僕の方が返答が早いからだ。そして、サーティエイトは生徒の群れから隠れるように、僕の傍らから離れない（はい。ドキドキです）。

これでは僕がサーティエイトに懐かれていると思われても仕方がない。

いや、サーティエイトが普通の少女なら、実際に懐かれても不思議ではない。

留学先の学校で、いきなり見知らぬ生徒に囲まれば、不安にもなるだろう。そんな中、わずか五日とはいえ、付き合のある僕を頼るのは自然な事だ。

——でも、【彼女たち】は断じて普通ではない。

と、この時の僕は考えていた。

——それに、サーティエイトは【彼女たち】の中でも、特にキリツとしていて、カッコいい美少女だ。当然同性にもモテる類で、実際、今も女子生徒の視線は熱い。僕みたいな男子に懐く娘ではない。

と、この時の僕は思っていた。

しかし、この話題はここで途切れる。

ある男子生徒が僕の肩に触れたからだ。

——神奈川？

僕はその男子生徒…神奈川の名を覚えていた。彼は同じ学年でも有名で、しかも、僕と同じ中学だったからだ。

それもいい意味で、だ。神奈川は学業成績のみならず、身体能力にも優れ、中学時代はサッカー部のエースで、高校でも期待のルーキー…：：：挙句、イケメンなのだ。

そんなイケメン男子の神奈川が僕に言う。

「じゃ、富山、俺、今日、お前の家に遊びに行ってもいいか？俺も街中育ちだからな。興味が湧いてきた」

「ごめん。今日は都合が…：：」

「なら、いつがいい？そっちの都合に合わせてからさ」

「いや、迂闊に言えない」

「…：：理由を聞いてもいいか？」

「偉そうにペラペラ喋ったけど、僕もてんやわんやなんだ。お客を泊めるのは慣れているといっても、年頃の、しかも外国人の女の子なんて、初めてだし。話自体急だったから、父さん母さんも混乱している。他人ひとを招く余裕がいつできるかなんて、迂闊に言えない。本当にごめん」

僕は早口でまくしたてた。

だが、実のところ、口で言う程、悪いとは思っていないかった。

神奈川の有名さには、もう一つの理由があった。それは彼が女子をとつかえひっかえしているという噂だ。勿論、男子が女子をとつかえひっかえしていけない道理はない。自由恋愛の当然の帰結に過ぎない。

ただ、僕はリアル女子にまるでモテない類だ。芳しからざる想いを抱かざるを得ない。

しかし…：：、

「あ、そうだな。俺こそ、すまん。無茶言って悪かった。いや、考えりやわかる話だったのにな」

と、神奈川は申し訳なさそうな顔で謝った。
それを見て、僕は罪悪感にかられた。

「結局、皆、悪い人じゃないんだ」

昼休み、僕は学生食堂の椅子に座って言った。

「あの神奈川君が典型的だけど、この学校の生徒は概ね善良だ。いや、僕は所詮高一で、その対人認識には誤りも多いだろうさ。しかしね、この高校の生徒に善良さを裏付けする知性と余裕がある事も概ね間違いない」

——中学とは大違いだよ。

僕はカレースプーンを動かしながら苦笑いした。

高志は田舎なので、まだまだ階層分化が進んでいない。都会のように上流は私立学校に行き、下流は公立学校に行く——という事もない。むしろ、高校以降は受験による選別がなされるため、公立の方が上流の子供が多くなる。

結果、この県立高志中部高校ともなれば、善良な良家の子弟が多くなる（この僕ですら、衣食住から教育に至るまで、取り立てて不自由なく育ててもらった）。

公立中学のように生徒が玉石混淆——つまり、柄の悪い生徒に悩まされてきた頃とは、訳が違う。

「勿論、中には性質のよくない生徒もいるだろう。しかし、それを言ったらキリがない。少なくとも、統計的な犯罪性向は極端に低いんだ。ここにいる生徒を恐れているようでは、この先、誰とも付き合えない。ここは積極的に多くの級友と交わるべきだよ！ ……にもかかわらず……！」

僕は声量を抑えつつ、語気を強める。

「何で、君らは僕の周りにいるの……?!」

そう、僕の周りには**「彼女たち」**金髪碧眼美少女9人が勢ぞろいしていた。

僕が学食に赴くと、まず、当然のように三つ編みお下げのサーティエイトが付いてきた。そこまではいい。先生にも面倒を頼まれたのだ。しかし、何故か残りの**「マリオン」**まで、集まってきた。それも濃紺のブレザー服姿——中部高校生の**「マリオン」**だけではない。純白のセーラー服姿——付属中学生の**「マリオン」**までも、だ。

つまり、今、僕の隣にはサーティエイトがいて、その周りに残り八人の【マリオン】が集い、さらにそれを遠巻きにし、興味深々な一般生徒が取り囲んでいる構図なのだ。……いや、僕も一般生徒のつもりなんだけどね。

そして、その僕を除く一般生徒が何を言っているのかは聞かなくてもわかる。

一つは【彼女たち】の美貌と金髪を讃える声。

もう一つは、そんな【彼女たち】と不釣り合いな僕を訝る声。

とりわけ後者については暗澹たる気持ちになる。僕もかつてモテモテな神奈川を見て、「リア充爆発しろ！」と口ずさんでいた類だ。勿論本気ではない。だから、『爆発』というありえない表現を用いる。今思えば、中学の親友はそれを「あれはそんなにいいもんでもないよ」と穏やかに宥めてきた。その理由がやっとわかった。

——これは……結構辛い……！

僕への視線に、それ程の悪意があるとは思えない。むしろ、好奇心が多いはずだ。しかし、それでも、一挙一動が衆目にさらわされるのは辛い。

「我々の存在が迷惑なのですか？」

サーティエイトの透徹した声が僕の隣で響いた。

彼女は衆目をもちとせず、月見蕎麦を食べていた。うっとりする程、綺麗な箸使いで、麵を取りこぼす事も、汁を弾き散らせる事もない。

食事をカレーにしてよかった。これなら、しくじって笑われる危険が少ない——と安堵している僕とは対照的である。

「……いや、理由を知りたい」

僕は気圧されるように言った。逆にサーティエイトは簡潔に言う。

「情報共有が目的です」

「……」

僕が黙っていると、別の【マリオン】——高校ブレザーでタイが青色だから三年、つまり最年長——多分ナインティーンが補足する。

「あなたからも指摘がありました。我々はこの社会に不慣れです。よって、慎重にならざるを得ない。しかし、同時に経験を重ねる必要もある。ならば、別個に行動した後に、互いの経験した内容を語り合い、情報を共有すべきと判断しました」

「そのために中学生の【マリオン】も呼んだ——と？」

「ええ。とはいえ、確かに【我々】9体＋1人で話し合うと混乱を招くでしょうから」と

ナインティーン（先輩？）は微妙に見当違いな事を言った。「フォーティフォー、あなたに第四世代以降——中学生五人の長を任せます。隣で話し合っていますから、優先度の高い情報があれば、即座に介入する事になるでしょう。が、そうでなければ、あなたの権限で処理なさい。第三世代以前——高校生四体十一人の情報は私が纏めます。その後、二人で情報共有しましょう」

「了く解。最先任として、『伍長』役を承らせて頂きまーす」

ややおどけた口調で応えたのはフォーティフォーなのだろう。大人びているが——中学セーラーでタイが青色だから三年——誕生日前十四歳で中学生組最年長で間違いない……はずだ。

一度に十人近くで話し合うと混乱を招く。だから、こういう時は五人位の集団に別れて話し合う。それは【マリオン】達の常套手段であった（補足すると、ボイスカウトでも似た習慣はあった。フォーティフォーが『伍長』という単語を持ち出したように、これは古来よりの人類の知恵なのだろう）。

しかし、僕が聞きたかったのはそういう事ではない。

「……それを僕の隣でやる必要は？ それに、何故、僕が数に入っているんです？」

「それはサーティエイトの独断」

と刺々しい口調で言ったのは、別の【マリオン】——高校ブレザーでタイが黄色だから二年——多分トゥエンティシックスだ。

「だから、私も説明を求めるわ。サーティエイト」

「必要だからです、トゥエンティシックス。推測もできるでしょう？」

そう言って、サーティエイトは蕎麦の汁を飲み干す。彼女は食べるのが早い。

「我々はあまりにもこの社会に不慣れ。よって、我々の間でどれだけ情報の共有を行ったところで、第三者からどのように評価されるかの推察は困難。だから、我々以外の視点が必要と判断しました」

「それって、僕から第三者視点の評価を聞きたいって事？」

「はい。部外秘指定が緩和されているのは今のところあなただけです。他に適任者がいません」

サーティエイトは理路整然と語った。その様は凛々しい。女子が騒ぐのもわかる。

ただ、休み時間の時とはまるで別人だった。だから、僕は問う。

「じゃあ、君が今までずっと黙っていたのは？」

「それは……」

「ちよつといいかな」

さわやかな声で、話に割り込んできたのは——あの神奈川だった。

「うわあ」とか、「おおー」とか、そんな声が僕以外の一般生徒から聞こえる。

いや、僕も当事者でなければ、声をあげていただろう。

サーティエイトに限らず、他の【マリオン】も付き合いがよくないと聞く。応対方法は様々だが、初日と言う事もあって、まずは様子見という感じらしい。——その程度の噂は僕の耳にも入る。

だからこそ、サーティエイト達に何故かひつつかれる僕が注目されるのだ。

いや、それでなくとも【彼女たち】は特筆すべき美少女だ。メツサリーナさんと同様、声をかけづらいところがある。その上、鷹揚さにも欠ける。

つまり、神奈川はその点で恐れ知らずなのだ。

それでも、今の神奈川はやや緊張しているように見える。いや、これは僕の眼力なのでアテにならない。ただ、少なくとも僕なら緊張する。

ところが、神奈川は僕には絶対できない行動に出た。

「ねえ、サーティエイトさん……少しでいいから、話を……」

と言いながら、彼は彼女の肩に手を伸ばしたのだった。

しかし、次の瞬間……、

パシッ——と学食に音が響く。

サーティエイトが伸ばされた神奈川の手を叩いたのだ。

「申し訳ありません。異性に触れるのは不愉快です」

「ああ、それはすまなかつ……」

「それと、今、私たちは話し合いの最中です。邪魔をしないでもらえますか？」

サーティエイトの言葉は冷たかった。その上、彼女は自分の手をウェットティッシュで拭き始める。神奈川に触れた事が汚らわしいと言わんばかりだ。

「……振られちゃったか……」

と、神奈川は肩を竦めた。大仰な仕草だった。

「すまんな。富山も。邪魔して悪かった」

「あ……うん」と、これは僕。情けないが、それ以外に思い付かなかった。

神奈川は苦笑いして、「じゃあな」とその場を立ち去る。

その内心はわからない。そもそも、僕には親しくない女性に声をかけた経験などない。だから、わからない。

しかし、僕なら、悲しい。悔しい。勇気を出して、声をかけたのだ。拒絶するにしても言い方があるだろう（大体、神奈川は僕よりは衛生に気を使っているはずだ）！

あるいはさほど傷付いてもないのかもしれない。神奈川が数多く女性に声をかけるのなら、イケメンでも勝率十割はありえまい。振られる事にも慣れているのかもしれない。やはり、わからない。ただ、心が重くなった。

そんな葛藤を知ってか知らずか、サーティエイトは言う。

「では、話を続けましょう」

——理不尽だ。

と、僕は思った。

神奈川に同情もした。

いや、僕は神奈川に嫉妬しながらも、神奈川を尊敬していたのだ。

神奈川は女子生徒をとつかえひつかえしているという。サーティエイトに声をかけた事自体その傍証と言ってよい。おそらく事実なのだろう。

しかし、それは神奈川の才能のみならぬ、努力の成果でもあるはずだ。

彼は顔がいいだけではない。身だしなみにも注意を払っている。例えば、足元一つ見て

も、神奈川はお洒落な運動靴スニーカーである。それも状況に応じて履き分けているらしい。対する

僕はどこへ行くにも無骨な登山靴トレッキングシューズである（だって便利なんでもん！）。着衣に至っては

……最早比べるまでもない。神奈川は常にカッコイイのだ。同じ制服を着ているのに、冴えない僕とは明らかに違う。多分、色々工夫しているのだろうが……生憎、興味のない僕では具体的に表現できない。ただ、母親に買い与えられたものを着続けている僕とは雲泥の差だろう。

学業成績については僕も悪くなかったのであえて言わない。が、サッカー部のエースでルーキーというのも、凄い。当人なりに頑張っているのは疑うまでもない。

ここまですれば、黙っていても女性は寄ってくる。

しかし、彼はその上でさらに積極的に女性に声をかけているのだ。

——これで振られるなんて、理不尽だ。

だから、僕の口からは自然とこんな台詞が出る。

「じゃあ、言わせてもらうよ、サーティエイト。神奈川君へのあの態度は評価できない」

「どういう意味ですか？」

サーティエイトの眉がいつも鋭角を成したのは気のせいだろうか？

「断るにしても、断り方があるってことさ。あれじゃあ、神奈川君の面目が立たない」

「彼が機嫌を損ね、私に害意を抱くという事ですか？」

「それは……」僕は正直そこまでは考えていなかった。これでは僕の方が世間知らずだ。「可能性は低いと思う。でも否定はできない」

実際のところ、よくわからないというのが本音だった。神奈川がどういう人間なのか、僕はよく知らない。いや、そもそも、他人の事を深く考えた事がないのだ。

第一、嫌がらせをするのが神奈川本人と限らない。神奈川には取り巻きもいる。本人が取り巻きへ直接間接指示するかもしれないし、取り巻きが独断するかもしれない。また、愉快犯が便乗する事もあるだろう。

いずれの可能性も中学時代程は酷くないと思うが……。

「どの道、相手の自尊心を無意味に傷つけるのは不必要なリスクだ。避けた方がいい」

「なるほど、マキャベリですか」

「孫子だって、似たような事を言っている」

僕はちよつと意地になった。繰り返言だが、西洋史は苦手だ。また、孫子にそんな一節があつたかどうかは自信がない。ただ、合理主義者なら言いそうだとは思う。

「では、どのようにすべきだったのでしょうか？」

「え？」

「彼は私に触れようとしたのです。私はどう対応すべきだったのでしょうか？」

「……」

僕は口籠った。

実際、難しいところだ。中学時代、僕に絡んできた不良生徒をはじめ、柄の悪い連中はよく他人にぺたぺた触る。親しくない相手に触られるのは概ね不愉快だから、相手ははねよける。するとそれを口実にますます絡んでくる。……効果的であるが故の陳腐な手だ。

ただ、柄の悪い連中も気弱な生徒を主に狙う。逆にはっきり拒絶すれば、連中と距離を置く事もできる（状況にもよるが）。現に中学の僕は、被害を受けながらも、そうやって嵐をしのいできた（警察は何をやっているんだとも思ったが）。

なら、今のサーティエイトはあの頃の僕と同じ判断を下しただけともいえる。

しかし、あの手の不良生徒と、神奈川を同じ扱いにするのは神奈川に申し訳ない。

「だから……もつと穏やかに断るべきだったと言っているんだよ」

結局あまり具体的でない発言になった。が、サーティエイトはそこには突っ込まない。

「……やけに彼を弁護しますね？」

「同じ男子だからね」

あれ、何でちよつと陰悪になっているだろう？

「繰り返しますが、彼は男性ですよ。そして、私は乙女です。乙女が男に触られるのを

拒むのは当然の権利です」

「乙女って、君は……」

「あー、何だか勘違いしているみたいだけどさ」そこで黙っていた他の【マリオン】——高校ブレザーでタイが黄色だから二年、鉢巻きがないからわかりにくい——多分、トゥエンティスリーだ。「あたしら【マリオン】は、全員男性恐怖症の気があるからね」

「はあ？」

「正確には『全員男性恐怖症の傾向ありと推測されている』かな。基本、女の園で育ったからさ。免疫ないんじゃないの？——という訳」

僕はメッサリーナさんが似たような事を仄めかしていたのを思い出した。しかし、

「今、平気に話しているじゃないですか」

「いや、そこそこ緊張しているよ。少なくとも君と同じ位は緊張しているね」

へえええー。このセミロング金髪美少女、僕が君らと話すのにどれだけ心臓バクバクか分かっているの？

「あとは慣れだね。ほら、**あたし**の話し方、**初日とは違うでしょ？**」

「それはまあ……その通りです」

言われてみれば、この（推定）トゥエンティスリーは随分と蓮っ葉な口調だ。しかし、初対面では、歳下（のはずな）僕に対しても敬語だった。いや、トゥエンティスリーだけではない。他の【マリオン】も……、

「あれは初対面の礼儀という意味もあっただけさ。純粹に最初はもつと緊張していたの。だから、硬かったでしょう？ あの時あたしの態度も口調も。《オリジナル||サーティシックス根源三十六体》でも似た事例が確認されている。……もつと言えば、あなたにも似たような経験ってない？」

「あります。ごく普通の事だと思います」

「だからね。サーティエイトもこれで意外と普通の女の子なの。見知らぬ男子が来れば、無表情の裏で緊張もするし、過敏にもなるって事」

「随分と人間臭いんですね」僕はポツリと呟き、己の失言に気付いた。「いえ、クローンやデザイナーベビーが非人間的なんていう偏見を持っている訳ではありません。勿論偏見が絶無かと言われれば不安になりますが、知識としては同じ人間だと理解しています」

「理解しているなら、私の対応も納得できるでしょう？」

サーティエイトの言葉にはやはり陰があった。僕は慌てて弁明する。

「いや……後天的な環境に違いがある以上、精神性の隔絶はあるかもしれないと覚悟していたんだ。実際、初対面では皆同じ種類の人形に見えちゃったし……」

「今は違うのですか？」

「うん。違う。君は君だってわかるよ。サーティエイト」
名前？を呼ぶと彼女は何も言わずにお茶を啜った。

「ふーん、これって、成功って事かな？」

トゥエンティスリーは呟いた。僕が首を傾げると、ナインティーンが補う。

「このように我々が外界に解放されるのは、社会性の学習だけでなく、多様性の獲得も目的としています」

「多様性：：ですか？」

「メツサリーナ姉さまを思い出して下さい」

僕の脳裏にV字を成す肌の白さが浮かびかけたが、多分、そういう事ではあるまい。

「我々とメツサリーナ姉さまとの差異は、オリジナルモデルかプロダクションモデルかの差異というよりも、むしろ年齢や経験の差です。そも、メツサリーナ姉さまも昔は我々と同じか、もつと：：そうですね、機械的と呼べるような性格だったそうですから」

「あの人：：ですか？」

「はい。よって、荒療治がてら外界で出資者の護衛などを務め、年齢や経験を重ねる事で、あのように素敵な個性を確立されたのです」

ナインティーンはうっとり頬を染めていた。何だか、いかがわしい気配がしなくてもない。

「しかしそれなら、もっと幼少期から情操教育を行えばよかったのでは？」

「そういう提案もあつたらしいけど：：すぐ却下だつてさ。それも提案者自らね」

「トミヤマ・ナカミチ君、我々の『完成度』をどう思います？ 現行の技術水準を鑑みたく上でどう考えます？」

「えっと、『オーバーツ』……でしょうか」

僕の一言に【彼女たち】は一斉に制服から携帯端末を取り出した。：：どうやら、知らない単語だったらしい。そして、検索の後、該当項目を発見したのか、クスリと笑い出す。畜生。どうせ、僕にも厨二病の気があるよ。

ただ、ナインティーンは姉のように優しく説明を重ねてくれる。

「そうですね。『OOPARTS』——『Out-of-Place Artifacts場違いな工芸品』とは言い得て妙だと思います。我々【マリオン】は決して現行の技術水準を逸脱した存在ではありませんが、望外の完成度であることは間違いありませんから」

望外の完成度——確かにそうだ。普通に考えれば、デザイナーベビーなど、常人よりもやや潜在能力に優れている程度なはずだ。それがこんな美少女揃いになった。いささか、常識はずれではあるが、美そのものがある種の優秀さである上、それ以外の有能さも既に

垣間見えている。まさに望外の完成度だ。

「そして、作成手順はわかっている。一定の再現性もある。さらに生命倫理バイオエシックスも絡んでくる上、育成には膨大な時間がかかる。最後者の特徴から、小難しい理屈を並べずとも次世代【マリオン】へは自然な情愛が生まれる。……この条件であんたならどうする？」

「安全性が確立されているなら、従順な模倣を続けますね。少なくとも漸進主義に陥る。保守的にならざるを得ない。……だから、いささか問題が出るとわかっていながら、前例踏襲を続けていると？」

ナインティーンとトゥエンティスリーは同時に頷いた。

なるほどな——と僕も納得した。下手にやり方を変え、致命的な……文字通り致命的な危険を冒すよりは、社会性や多様性を犠牲にした安全策を取っているわけだ。

しかし……

「それ以上に『ファーストトリプランナー第一設計者』の深慮を尊重すべきです」

と、サーティエイトは一人異見した。

【我々】はまず規律を習得する事が第一。個性など二の次、三の次です」

「……という側面もありますね」ナインティーンは微笑みつつ言った。「これは上の方でも意見が分かれています。ただし『ファーストトリプランナー第一設計者』が【我々】に人形のような性質を要求したのは事実ですね。自分に絶対服従する理想の美少女集団が欲しかったらしく……」

「……それ、知性体として無理がありませんか？ 人形が欲しいなら、人形を作ればいい。人形にはない性質が欲しいから、人間を作ったのでしょう？」

「無理があるなら解決する。それが人間であり、努力であり、教育です」

サーティエイトは力強く異見を続ける。

【君たち】も同じでしょう？ この学校の生徒は授業中皆一様に椅子に座り、教師の話
を黙って聞きます。先天的に無理のある性質ですよ？ しかし、それは後天的に解決し
た——それが教育です。教育でまず重要なのは規律であり、個性はその次という証左で
す」

「ま、まあ……たしかに……」

僕は曖昧にだが肯定する。

わからないでもない。実際、高校に入ってから、随分と自由になった。何事も小中の頃
ほど、五月蠅く言われない。性質の悪い生徒を入学試験で排除できる結果と考えていたが、
小中で規律を身に着けた結果、個性を許されるようになったと言えなくもない。

……逆に言えば、規律を身に着けたなら、次は個性が許される——とも考えうる。
のだが、サーティエイトはまだまだ規律が足りないと言う。

「プロジェクトの中でも《マリオンプラン》は稀有な成功例です。徹底した規律こそが、その要です。これを軽視など軽率です。勿論、いずれは漸進主義にとどまらぬ革新もあるでしょう。メツサリーナ姉さまのように年齢を重ねた上での挑戦も必要でしょう。しかし、いずれの意味でも【我々】は未熟なのです。昔からシュハリと言い、【我々】はそのシュの段階にあるのです」

「シュハリ……？ ああ『守破離』ね……」

日本の伝統芸能用語で、形稽古等の時に使われる言葉らしい。一に【形】を守り、二に【形】を破り、三に【形】を離れる。要するに修行の段階を表す。

現代風に言えば、OJTなどにおける心構えなのだろう。まずは手本となる先輩のやり方を真似すべしという考えだ（酷い職場だと、技術独占のために『人の真似をするな！』とか言われる事もあるらしいが……まともな職場なら、先輩は模倣させてくれるものだし、後輩も進んで模倣するものだ）。

最初は誰でも手本となる【形】を守るのが効率的だ。だから、【形】を忠実になぞれる位になってから、文字通りの【形】破りに挑み、自分なりの応用を考えればよい（最後にはその【形】を離れるというが、そこまでいくと想像が及ばない）。

合理的な発想だとは思う。

ただ、サーティエイトが饒舌を振るっている事自体が自身の主張と矛盾している。

「【我々】には《ファーストトリプランナー第一設計者》と《オリジナルリサーテイシックス根源三十六体》が残してくれた記録があります。ならば、まずはその【形】を守る事こそが……」

「……というカタブツさもサーティエイトに芽生えつつある個性なのですね？」

僕は思わず突っ込んだ。ついでにちよつと洒落てみる。

するとナインティーンとトゥエンティスリーが明るく笑った。どうやら、この『妹』は相当可愛がられているようだ。

「あなたのおっしゃる通り、この娘はその胸のふくらみのように硬いのです。ですから、神奈川君への態度はやむをえないのでしよう」

「……しかし、それならあの自己紹介はやめるべきでは？ 彼もあんな自己紹介をされた

から、気さくな女性と誤解したのかもしれない」

「ああいう自己紹介って？」

「……スリーサイズ云々ですよ」

ついでに言葉の端々にあるメツサリーナさんの影響も、それとメツサリーナさんと言え
ば、一応補足説明はあったが……。

「それと人前で裸になる癖も、です」

僕は視線を宙に浮かせた。脳裏に美少女九人の着替え姿が浮かんだからだ。

「あれでは嫌でも視界に入って……」

「見たいなら、見れば？」

その台詞は今まで黙っていたトウエンティシックスのものだった。

「いや君……」

彼女は真っ先に全裸を披露している。しかも、実際見せつけるような素振りすらした。

あの時ブラなしでも崩れなかったEカップは、高校の制服ブレザーの下からも強烈に自己主張している。

僕の頬が熱くなった。

しかし、トウエンティシックスは我関せずと優雅にマロングラッセを食べている。

「トミヤマナカミチ、顔が赤いですよ。汗も多い。どうしました？」

サーティエイトは朝礼の時と同じ台詞を吐いた。

しかし、その声音が不機嫌に思えたのは気のせいだろうか？

六日目

六時間目終了後、メツサリーナさんからメールが来た。

『人斬りSAMURAIガールにフクラギを捌いてもらいました。今夜、そちらに持つていくので、夕飯は皆でお刺身ですく♥』

僕は返信にとりかかる。人斬りSAMURAIガール云々も気になったが、とりあえず夕飯の中身が先決だ。

『もし間に合うなら、フクラギの粗アラも持って来て下さい。それを味噌汁にしたいので』
間に合うかな？——と考え、送信すると、数分後に『了解♥』と端的な返信が来た。

『『フクラギ』とは何ですか？』

「うわああっ」

僕は思わず、椅子から転げ落ちそうになる。いつの間にか、サーティエイトが僕の携帯端末を覗き込んでいたのだ。

「……ブ、鰯ブリの幼魚の事だよ」僕は体を建て直し、真横にあるサーティエイトの顔にドキマギしながら——てか、頭が近い！ 相変わらず、いい匂いがする！ 金髪も綺麗！——解説する。「フクラギは鰯ブリと違って、脂あぶらが少ないけど、その分、刺身には向いている。鰯

まで育つと脂が強過ぎる。醤油を弾いちやうぐらいだからね」
「なるほど、不勉強でした」

と、サーティエイトは言った。本気で悔しがっていようだ。

いや、その理屈はおかしい。フクラギとカタカナ表記されるのは、これが方言だからだ。
いや待て、何故メツサリーナさんは鰯ブリをこの北陸方言で呼ぶのか？

「……ていうか、メツサリーナさん、今日の夕飯うちで食べていくのかな？」

勿論、僕は一向に構わない。元々、十人分の夕飯を用意する予定だったのだ。今更一人加わったところで、大して手間は変わらない。

ただ、メツサリーナさんは僕へ【彼女たち】を任せておきながら、これまで共に食事をした事すらなかった。それどころか、いつも用件を一方的に伝えると、慌てて去っている。それが今日に限って——と首を傾げたくはなる。

だが、隣のサーティエイトは断言する。

「メツサリーナ姉さまはいらっしゃいます」

「……たしかに、メールの文面からはそんな意図が汲み取るね」

「それに加え、今日は我々の初登校日です。不測の事態が起こる危険も高い。故にメツサリーナ姉さまは多忙をおして、様子を伺いたいのでしょう」

サーティエイトは頬を染め、言葉を重ねる。

「ああ、今夜は【姉妹】水入らず——一緒のお風呂やお布団という事もあります」

……あのヴァイタルウェアと違い、このブレザースカート姿では彼女の手足が露出する。そのため、サーティエイトのしろ皓い肌が眩しい。

その処女雪のしろ皓さが、しかし、『メツサリーナ姉さま』への想いで、赤らんでいた。

僕の心に言い知れぬ感情が芽生えた。

サーティエイトはメツサリーナさんと風呂や布団を共にするかもと言った。……十分にありえる事だ。元々、この【姉妹】達はとても仲がいい。例えば、ファイティワンとファイティツ一のとつても仲良しさんな場面すら、僕は何度か見てしまった。他の【姉妹】もべたべたくつき合っている。隠してもいない。

だから、サーティエイトがメツサリーナさんと仲良くするのも、大いにありえるのだ。

夕餉時——。

客間にメツサリーナさんとB系列量産型9人が並んだ姿は圧巻だった。

まさに金髪碧眼美少女姉妹大集合！

それだけに僕は自分の存在が場違いな気がしていた。

メッサリーナさんは色無地の紬姿つむぎである。……僕の家に入ると共に「今日は泊まっていきます」と宣言し、そこで件のライダースーツもどき——ヴァイタルスーツというらしい——を脱ぎ出した。極上の裸身がまたも表れ、僕が慌てて目を背けると、しゅるしゅると衣擦れの音がした。しばらくして、「着替え終わりましたよ」の声に振り返ると、紬姿つむぎのメッサリーナさんが立っていた。メッサリーナさんも今までずっとぴっちり衣装だった。だから、【彼女たち】が制服に着替えた時のように、美貌に新鮮さが加わり、改めて見惚れてしまった……。

——でも、メッサリーナさん、今、履いてないんじゃないか？　というか、やっぱり付けていなかった？

思春期男子的には、確かめてみたいが、訊ねる勇氣はない。相変わらず無防備な胸元と、新しく無防備になった太股に、凝視する事すら憚れる。

しかし、【マリオン】は僕とは違う。躊躇いもなく、メッサリーナさんの紬姿つむぎにまとわりつく。また、メッサリーナさんも喜んで【妹】たちを待らせる。今では持ち込んだ純米日本酒を、美少女達にかわるがわる酌をされており——あたかも、和風旅館の接待だった（いや、B系列量産型9人はぴっちり衣装のヴァイタルウェアなのだが）。

居た堪れない事この上ない。どう考えても僕はお邪魔虫である。

僕は仕方なく、昆布包みのフクラギの刺身山盛りに箸を伸ばす。

口に運び、思わず舌鼓を打った。下手な刺身にある臭みや苦みが全くない。フクラギの濃厚な甘みうまだけが伝わってくる。素材が新鮮なだけではこうはならない。

割烹主従を略して割烹、その血抜きと包丁捌きの見事さ故だろう。

——人斬りSAMURAIガール……一体何者なんだ？

僕は首を傾げながら、次から次へとフクラギを醤油につけては口に運ぶ。美味しいので、なかなか止まらない。それどころか、皿の上の醤油が先に尽きたぐらいだ。

すると見計らったように、

「どうぞ、醤油です」

「あ、ああ、ありがとう」

隣に座っていたサーティエイトが僕に醤油瓶を差し出してきた。

サーティエイトも勿論メッサリーナさんに酌——正確には現状報告も兼ねた挨拶——をしに行ったのだが、その後、席に戻ってきたらしい。

醤油瓶を受け取った僕は、前々からの疑問を訪ねる。

「あの…：昼もそうだったけど…：何で僕の隣に？」

「嫌なのですか？」

「そんな事はない」むしろ嬉しい——というのが僕の本音だが、「ただ理由があるなら…：」

「年齢順です」

サーティエイトは僕の質問が終わる前に答えた。

——確かに、その通りなんだけど…：…。

今更だが、【彼女たち】の中で高校一年十五歳なのは、このサーティエイトだけだった。だから、僕と接触する機会が多いのも不自然ではない。

——にしても、言い方きついよなあ。

とは思う。硬質な言動は【彼女たち】に共通しており、≪マリオン≫のさしずめ初期設定なのだろう。

ただ、その中でもサーティエイトは群を抜いていた。前述の通り、既に他のマリオンは初対面の時ほど硬質ではない。話し方にも各々の特徴が見て取れる。それが【彼女たち】が獲得しつつある個性なのだろう。ところが、サーティエイトだけは頑なに個性を拒み、初期設定を貫いているように見える。

——その上、何だかんだで僕の傍に寄ってくるし…：…。

一応、今のようにそれ相応の理由はある。質問すれば、回答がある。しかし、あまりに滑らかな回答が続くと、まるで、サーティエイトが僕の寄りつく口実を探しているように思えてくる。

——いや、そうだったら、嬉しいんだけど…：…。

こんな美少女に懐かれて嫌がる男子は異常だろう。また、サーティエイトは【姉】達に可愛がられているだけでなく、【妹】達からも慕われている（繰り返し返すが、たしかに女子にウケそうな美少女だ）。だから、サーティエイトが近寄ってくると、もれなく他の金髪碧眼美少女八人も付いてくる。気疲れしないかと言えば、嘘になるが、嬉しくないと言え
ば、もっと嘘になる。

——ただ、懐かれる理由がない。

理由を思いつかないわけではない。むしろ、とっくに思い付いている。しかし、脳裏でそれは既に否定済みでもだった。

「あー、とみやま なかみち富山中道君？」

メッサリーナさんが言った。

「え、はい」

「テレビをつけてもいいですか？　ちょうど見せておきたいニュース番組があるので」
「ああ、どうぞ」

そして、メッサリーナさんはテレビをつける。
ちなみに僕は日頃テレビを見ない。かろうじて、アニメを録画して見る位だ。特にニュースの類はネット、あるいは新聞を読めばいいと思っている。情報の一覧性は動画よりも活字の方が上だし……テレビニュースには（厳密には新聞もだが） unnecessary 部分が多い。時事通信社のような簡潔なニュースソースが僕の好みなのだ。

しかし、メッサリーナさんはテレビのような文化に触れる事も必要という考えらしい。ちやうどニュースでは『スパルタクス』の特集報道をしていた。

特集なので、その成り立ちから説明している。

スパルタクス——それは日本在住の外国人労働者の中から、発生した非合法武装組織である。彼らをテロリストと呼ぶか、レジスタンスと呼ぶかは人それぞれだ。

事の発端は前世紀末期から日本で活発になった移民受け入れ運動に遡る。

一応当時から、名目では移民の人権は十分に考慮し、厳正な審査を実施するという事になっていった。だが、予め指摘されていたように、それは名目でしかなかった。名目を遵守する能力——具体的には移民労働者に払う十分な賃金が日本には欠けていたのだ。

結局、国際交流という名の強制連行、人材派遣という名の奴隷貿易になってしまふ。

そして、とうとう起こるべくして事件が起きた。

一人の日本人老婆がその介護をしていた外国人労働者に撲殺されたのだ。

当然、殺人事件となったが、似た境遇にあった外国人には、彼を擁護する声も多かった。何でも、その労働環境は激甚極まるものがあつたらしい。

犯行そのものは極めて発作的なものだったものの、そういった草の根の支援によって、殺人者は警察の手から逃れ続けた。やがて、支援者たちは、彼と彼の下に集った同志達を古の英雄になぞられ、こう呼んだ。

すなわち『スパルタクス』——と。

そして、次に『スパルタクスの現状』が描かれていた。具体的には、山間部の過疎地を占拠したり、防犯能力のないお年寄りの家に押し入ったりする外国人犯罪者集団だ。

……シヤレになっていない。いや、かつての維新志士も似た様なものだったけど……。ただ、この犯罪者集団が外国人だけで構成されているような内容は気になった。

——昔の倭寇だって『大抵真倭十之三、従倭者十之七』と言われていた。自称外国人の日本人も多いんじゃないか？

とも僕は思ったが、

——あ、でも、『移民受け入れ一千万人計画』って、頓挫はしたけど、母国に帰る事すらできなくなつた貧困層を生み出したからなあ。

ならば、外国人犯罪率も高くならざるを得ないのだろう。

うむ。いい特集だ。アニメ好きでテレビ嫌いな偏見を戒めなくては——と、僕はご飯をかき込む。すると、

「ああ、もう、みっともない」

サーティエイトがそう言って、僕に顔を寄せた。

そして、サーティエイトの舌が僕の頬をペロリと舐める。

「……っ！」

僕は精神力を総動員して自制を図った。おかげで、声も身動きも抑えきる事が出来た。

そのため、他の金髪美少女達には気づかれなかった。元より、【彼女たち】はメツサリーナさんに夢中だ。

どうやら先程御飯をかき込んだ時、米粒が僕の頬にくっついてしまったらしい。それをサーティエイトが舐め取ったのだろう。

……いずれにせよ、僕の心は千々に乱れる。

——何考えているんだ?! この娘は?!

その動揺を視線に乗せて、サーティエイトに向けるものの、彼女は「何か問題でも?」と平然と問い返す。

……僕が真つ先に除外した可能性、それは**サーティエイトが僕に恋している可能性**だ。

一応、お互いに年頃の男女だ。可能性は絶無ではない。ただし、絶無ではないにせよ、皆無に近いとは思っていた。何しろ、僕はモテない。女の子には縁がない。これは数多の経験が証明している。いや、僕の魅力が絶無かと問われれば、流石に断言は出来かねるが、サーティエイトのような美少女に好かれる理由は無い。【彼女たち】の男性経験の乏しさを考慮しても、これは断言できる。

——だって、それなら、神奈川の方がいいもん!

あるいは恋愛ではなく、情愛を僕に抱いているのかもしれない(……この二つの違いも明確ではないが)。繰り返すが、【マリオン】同士は仲睦まじい。今も競われているメツサリーナさんへの情愛だけではない。残る九人の【彼女たち】同士の睦み合いも甚だしい。姉妹の情愛と肉欲の区別が怪しくなる場面も多かった。その情愛の対象に僕も入っているのかもしれない。

——いやいやしかし……。

「あ、そうだー!」

メツサリーナさんは美少女に囲まれながら、突然わざとらしい大声をあげた。

「富山君、富山君は【十字軍】というものを御存知ですか？」

「……く、くるせいど？……あ、十字軍ですか？ ええと、西洋史には無知なので……」

「しかし、単語を知っているなら、感想は抱けるでしょう？」

僕は洪々本音を語る。

「……キリスト教徒には申し訳ありませんが、あまりいい印象はありません。具体的には『異教徒は皆殺しだー！』な暴徒の群れ——ですか？ 魔女狩りや漫画規制と同類に思えます」

「辛辣ですね」メツサリーナさんは苦笑する。「捕捉しますと、同じキリスト教徒でも進路上にあったビサンツ人は【十字軍】に略奪され虐殺されています。元々【十字軍】はそのビサンツ人キリスト教徒を助けて、異教徒と戦うはずであったのに——です」

嫌な話だ。しかし、唐突だな——と僕は思った。

だが、メツサリーナさんは説明を続ける。

「もっとも、【十字軍】にしてみれば、自分達は邪教徒と戦う聖戦士です。協力しない輩はそれだけで邪悪なる異教徒の仲間。だから、通りすがりの村々が食糧の提供を惜しめば、それは異教徒と同じ殲滅対象たりえたのかもしれない」

「……【十字軍】って、数万人単位でしょう？ 中世の村落にそんな連中が押し掛けて、『喰い物を寄こせ』って……渡したら村の方が……」

僕は惨い話を避けようとした。ところが、メツサリーナさんはほろ酔いしているのか、話を避けようとはしない。

「さて、【十字軍】は何故そのような集団だったのでしょうか？」

「……？ そりゃ、近代以前の軍隊でちゃんと統制されている方が珍しいのでは？」僕は言葉を重ねる。「現代でも貧困国は似た水準でしょうし、第二次世界大戦中は旧日本軍も、略奪や虐殺をやっています。ソ連や中国はもっと酷かった。結局、飢餓に陥って、自制を保てる者はまずおらず、軍隊のような暴力装置では、その蛮行に歯止めがからなくなるという事では？ 大体、歴史上最も豊かであろう現代米軍ですら、時々はやらかすんです。当時豊かとは言えなかった西欧諸国による【十字軍】なら、推して知るべしかと」

西洋史に疎い僕にはこんな一般論しか言えない。

「西欧諸国の貧困が【十字軍】の蛮行の一因であるか？」

「違うんですか？ たしか当時の西欧って、中東に比べると貧しい辺境だったのでは？ 僕は昔の日本と中国みたいな関係だったと理解しています……」

「そうですね。たしかに西欧や日本は、中東や中国のような古代文明の中心地から見れば、

貧しい辺境でしかありませんでした。とはいえ、後の産業革命での逆転劇が示すように、決して無知蒙昧な未開人ばかりだったわけでもありません。【十字軍】の蛮行にはもう一つ要因があります」

「……と言いますと？」

「端的に言つて、【十字軍】に参加したのは、西欧の中でもとりわけ貧しい者たちであったという事です。当然ですね。生まれ故郷である西欧で十分に生活できる階層は、わざわざ遠い異国に攻め入ろうとははしません」

豊かな者たちは【十字軍】に参加したりなどしない。後の大航海時代にも似ているが、この構造は【十字軍】では、より残酷な形で現れた。

「貧しい国の中でもとりわけ貧しかった者が、武器を持って寄り集まった集団——それが【十字軍】の内実であったわけです。おまけに貧しさに付帯する無知と狂信に満ちている。そんな【十字軍】が当時世界で最も豊かだった地域にやってきたのです。品行方正に振る舞えるはずありません」

「……最初に【十字軍】を呼んだビサンツ人は何を考えていたんでしょうね……」

僕は言いながらも薄々わかっていた。そんな大事になるとは思っていなかった。当座をしのぎ切るのに精一杯だった。後の事は知った事ではなかった。……すべて、日本の移民推進運動と同じだ。《スパルタクス》を産み出した輩と同じだ。

この暴れ回っている外国人移民も最初から犯罪者集団になるため、日本へやってきたのではあるまい。呼び寄せられたものの、低賃金で奴隷として扱われ、挙句失業したりする。元々貧しい外国人なので——それこそ【十字軍】と同じ理由から、豊かな外国人は大勢で日本に来たりはしないので——すぐに生活ができなくなる。その結果、やむにやまれずという事例が多いはずだ。

（勿論、平和に日本へ溶け込んでいる移民も大勢いる。しかし、それは富裕層に生まれて、その高い教育水準で有用な技能を身に付けた少数の秀才と、苦学の末に異能を発揮したさらに少数の天才だ。移民政策によって、一山幾らで売り買いされる多数ではない）
メッサリーナさんは纏める。

「自分達に都合のいい奴隷がいるはず——僕の理想の相手がどこかにいるはず——そんな下らない妄想に従っているとロクな事にならない。……そう言う事ですねえ」

僕は愚かだった。

この時、メッサリーナさんが言いたかったのは《スパルタクス》の事ではなかったのだ。